

※ 1998 年夏 「はてなのヒロシマ」 あらすじ

98 年 4 月ぼく(幸二)は 2 年に進級した。顧問の S 先生は文化祭冊子のテーマを「さみしさ」とするから 9 月までに書き上げるようにと宣言した。

前作では明かさなかったけれど、ぼくは一人っ子ではなく大学生の兄貴がいる。それと Y 高音楽コースの生徒だ。ただ、多くの生徒がピアノや声楽で音楽大学を目指す中、自分はギターが弾けるくらい。作曲が趣味で楽譜は読めたけれど、ソルフェージュなど毎回ヒトケタ得点の劣等生だった。

それから前作で一つ年上のいとこ、のん子との出来事を私小説風に書いたが、かなりフィクションが混じっていた。のん子は『透明な叫び』を読んで怒り、報復小説を書くつもりで伝えてきた。その後彼女と喫茶店で会って完成作を読んだ。意外と穏やかな自伝的作品だった。そのときののん子がたくさん食べるのでへんだなと思った。

彼女の母親とぼくの母は姉妹でどちらも離婚の危機に陥っていた。のん子は後日おばさんと家を出てぼくの家は母さんが実家に帰ってしまった。父さんは仕事で忙しく、ぼくは今一人暮らしみたいなもんだ。

5 月末中間試験の最終日、文芸部恒例の「公園を描く」活動があった。学校近くの公園を男女ペアで散策してそのことを書く課題で、ぼくはくじびきによってペンネーム「マーヤ」こと綾部摩耶さんに当たった。去年の秋「博物館を描く」課題のとき「先に行ってみようよ」と誘われ、すっぱかされた女子部員だ。

あれ以来ぼくはマーヤに惹かれていたので有頂天になった。公園を歩きながらぼくとマーヤはいろいろ語り合った。彼女はかつてバンドを組んでボーカルだとわかった。簡単な楽譜なら読めるとも言った。帰宅後ぼくはこの日のことを「強制デートはるんるん気分」と題して書いた。だが、はしゃぎ過ぎと思って「てっせんの花」に変えて提出した。それでも部員はすぐにぼくの作と見抜いてあきれていた。

6 月文芸部は埼玉県東松山市にある丸木美術館を訪ねた。丸木夫妻の「原爆の図」がある。この学年の修学旅行は北海道なので、広島や長崎に行くことはない。S 先生は「高校時代原爆について考えてほしい」との思いで設定したと説明した。原爆の図はとても衝撃的で、ぼくは「霊気を発する絵たち」と題して書いた。

7 月の期末試験は中間にもましてさんざんな結果に終わった。丸木美術館の合評後マーヤはぼくに驚くべき計画を打ち明けた。「夏休みに文芸部員だけで広島に行って原爆ドームや資料館を見学しないか」と言うのだ。部員は当初乗り気だった。ぼくはのん子にどうするか聞いたり、時刻表を見て検討した。だが、一泊二日で費用数万円はかかるとわかり、みんな引いてしまった。マーヤだけはぜひ行きたいと言い、ぼくは五分五分の気持ちだった。

その夜自宅にいるとのん子から電話があった。「助けて」と言うので、ぼくはすぐタクシーで Z 市のマンションまで行った。部屋は食べ物の袋などゴミであふれ、彼女は冷蔵庫を背にがつがつ食べまくっていた。止められないという。やがてトイレに行って食べたもの

を吐くと、のん子は落ち着いた。そして、「ママが帰って来るから」と部屋を片付け始め、一時間ほどで部屋はきれいになった。ぼくはあっけにとられた。

やがてのん子のママが帰宅したので、ぼくは彼女の過食症を話した。だが、あまり心配してくれない。「何を食べるかは彼女の自由」と言われ、ぼくは怒りを抑え切れずおぼさんを責めた。彼女はのん子の腕や手を触ってようやく異変に気づき、病院に連れて行くことになった。

文芸部の広島旅行は風前の灯火だった。夏休み前ぼくとマーヤはS先生に呼び出され、秘密計画がばれてしまった。だが、先生はぼくとマーヤを広島に連れて行くと言ってくれた。そして8月5日、横浜駅から夜行特急に乗って岡山に向かった。車中でぼくとマーヤはいろいろ語り合い、ぼくが作った歌を見せた。

翌6日朝広島につくと平和記念式典に参加した。その後原爆資料館を見学し、原爆ドームにも行った。ドーム近くでは5人組のバンドが反戦の歌を歌っていた。

マーヤは突然「はてな、君がつくった歌をここで歌おうよ」と、まさかの提案をしてきた……。

[参考] 1997年夏「はてなの透明な叫び」あらすじ

97年4月Y高に入学した「ぼく」は文芸部に入部した。

顧問は国語科のS先生。文芸部に上級生は不在で、S先生は部活説明会に集まった8名の新入生に「課題→実作→合評」という活動をしたいと提案した。

新入生のぼくらにいやなどという資格も権利もなく、文芸部はその活動をスタートさせた。1学期の活動を経て先生は9月末の文化祭で発行する冊子のテーマを「叫び」とすることに決めた。

ぼくはムンクの有名な絵『叫び』を取り上げようと思い、あの人物は一体何を叫んでいるのか、まずそれを探求することにした。ママやパパに聞き、中学校時代の親友Oに「何を叫んでいるか」尋ねた。彼らは答えてくれたけれど、どうもしっくりこなかった。

数日後ぼくは一つ年上の従姉の家に行って話し合った。いここはムンクの画集を見せてくれた。それによってムンクが不幸な生い立ちを持っていること、『叫び』には似たような作品があり、薄気味悪い赤ん坊か子どもの顔が『叫び』の人物に似ていることを知った。

いここはオレンジジュースやスイカを出してくれた。部屋は彼女と二人っきりだったので、ぼくは微妙な感情にとらわれてドキドキした。そのうち彼女の両親が離婚することになったと聞いて驚く。いここは涙を流した。結局彼女が語った『叫び』の答えはいとこの心境を反映しているように思えた。

帰路に就いてぼくはゲームのCDを返し忘れたことに気づき、再び家に行った。彼女はいなかった。そのとき庭で大変なものを見つけた。いここが帰るのを待つかどうか考えながら、ぼくは『叫び』の人物が何を叫んでいるかわかった気がした。これだと思い、黙っていとこの家を出た。

帰宅後ママにぼくが思いついた考えを話すと、ママはあの人物のように顔をゆがめて…。

はてなのヒロシマ——続「透明な叫び」

久保はてな

文化祭冊子『百八煩惱』統一テーマ「さみしさ」

世の中は いじめられたくない子どもたちであふれています でも
いじめられたくない子どもが なぜ子どもをいじめるのでしょうか
だから世の中は いじめられたくないのに いじめる子どもたちであふれています

世の中は やさしさを求める やさしい人たちであふれています でも
やさしさを求める人が なぜ人にやさしくなれないのでしょうか
だから世の中は やさしさを求めるのに やさしくない人たちであふれています

世の中は 争いごとが嫌いな人たちであふれています でも
争いごとが嫌いな人たちが 自分の利益に関わると なぜ争うのでしょうか
国の利益に関わると なぜ戦争を起こすのでしょうか
だから世の中は 争いごとが嫌いなのに 争う人と国であふれています

世の中は 自分のさみしさをわかってほしいと思う人たちであふれています でも
お母さんは 子どもは なぜお父さんのさみしさをわかってあげないのでしょうか
お父さんは 子どもは なぜお母さんのさみしさをわかってあげないのでしょうか
お父さんは お母さんは なぜ子どものさみしさをわかってあげないのでしょうか
だから世の中は さみしさをわかってほしいと思うのに
さみしさをわかってあげられない
さみしい人たちであふれています

[1]

文芸部顧問のS先生が「今年の文化祭、文芸誌の共通テーマは『さみしさ』だ」
——そう宣言したのは五月になってすぐのことだ。

さらに先生は「これが文化祭号の巻頭言だ」と言って、この詩らしきものをみんなに紹介した。

ぼくらは一瞬ぼかんとしてしまった。去年の夏は文芸部全員に文化祭の共通テーマを考えさせながら、最終的には先生が『叫び』に決めた。今年ははなっから先生がテーマを出してきたことになる。それも「さみしさ——これで行くぞ」と来た。いよいよもって独裁的だ。

部員連中は何か文句を言いたそうだったけど、「えー！」とか「なんでー」なんて声を上げつつ表立った反論はなかった。ぼくも反論のしようがなかったので黙ってしまった。

先生は続けて「さみしさというテーマは通奏低音みたいなもんだ。だから、去年みんながそれぞれ提案したテーマに基づいて書いていい」とも言った。つまり、自分個人のテーマに共通テーマ「さみしさ」をからませろってわけだ。

たとえば、「戦争—さみしさ」、「そば（ホット）—さみしさ」、「縁は異なるもの味なもの—さみしさ」等々——というわけだ。「戦争・そば・縁は異なるもの〜」は去年部員が共通テーマとして挙げた言葉だ。

何だかミスマッチって言うか妙な付け合わせだ。自分のテーマに基づいて自由に書いていい、ただし「さみしさ」と関係づけなさい。そういう理屈らしい。こう言われると、ますます反論し辛くなった。

実際の話、去年の文化祭では各自共通テーマ「叫び」の作品と、自由作の二作を出すことになっていた。ところが、先生は部員が提出した自由作のいくつかを「叫び」の方に入れた。

先生曰く「叫びのテーマなんて何か書いてりゃだいたい関係してくるからいいんだ」などと語っていた。ずいぶんいいかげんだと思ったけれど、ぼくらはそれ以上何も言わなかった。それで今回にしても、結局うまくまるめこまれたって感じだ。

ただ、部員が先生の提案に強く反論しなかったのは別の理由もある。

Y高文芸部は顧問のS先生が次から次に繰り出す(強引な?)課題と、その制作でもっていろいろとあつて課題は絶対なんだ。

Y高文芸部は一昨年まで二年間部員ゼロだった(S先生談)。昨年四月、ぼくら一年生だけ八人で再スタートした。先生が出す「課題」をこなすというのは文芸部復活の最低条件だった。

昨年の文化祭号には一年生八人が作品を掲載した。それまでの課題は「スケッチタイプ」と言って、見たまま聞いたままを絵筆ならぬペンで書く小品中心だった。小説タイプを充分練習しないまま九月の文化祭を迎えた。そして、ろくに推敲もしない「叫び」の作品や自由作を文化祭号に載けてしまった。

ぼくらはかなりいい冊子ができた(手作りだけど表紙はカラーだった)と自負していた。しかし、文化祭終了後の合評で、先生から課題作が「小説」になっていないこと、自由作品の中には前後に矛盾があるなど、かなり強烈に批判された。結果部員は小説タイプの創作を本腰入れて勉強する必要がある、と自覚するようになった。

文化祭後文芸部は一人退部したものの新たに四人入部して、計十一人になった(男子が

五人に女子が六人。四月に部員募集をしたけれど、残念ながら一年生は入部ゼロだった)。

部員数も増えたところで、昨年後半は本格的に小説タイプの創作に取り組むことになった。そのとき先生が出した課題がまたちょっと変わっていた。

課題を列挙してみると、小説タイプでは、

・「ある～時、ある～所に、おじいさんとおばあさんがいました」の書き出しで『物語』を作る

・現代都市をテーマに『絵本』を作る

・源信の『往生要集』を参考に、『現代版地獄物語』を作る——などだ。

スケッチタイプでは昨年十一月に市の小さな博物館を訪ねて「博物館を描く」課題をこなした。ぼくはここで「失恋博物館」と題した小品を提出した。

合間に先生の小説講義なんかもあって、小説の三要素や構想の立て方、描写と説明、伏線の入れ方などを勉強した。最後の「現代版地獄物語」はさすがにみんな苦勞していた。

締め切りは一月初めだったのに、のびにのびて結局製本できたのが三月末。合評をやったのは四月に入ってから二年になってからだ。

ぼくらレベルの話だけど、かなりの長編があったし「地獄物語」は力作揃いだった。

だから、今は結構しんどい課題でもこなせるだけの力量がついて来た。それに部長のKのようにどんな課題が出て、自分の流儀を変えないやつもいる。だから、課題はあると言えばあるし、ないと言ってもいいくらいだ。

……そんなわけで、一九九八年今年の文芸部、文化祭号の共通テーマは「さみしさ」になった。でも、「さみしさ」なんて一体何を書くんだ？

ぼくが帰宅した時は六時を過ぎていた。いつもの癖でかばんを左肩に担ぎなおして、暗い玄関に入った。「ただいま」って言ったけど、誰の返事もない。言わなくてもいいのに、まだただいまを言う癖から抜け出せない。

リビング兼台所に入って電気をつけると、かばんとビニール袋の「ほか弁」をテーブルに置いた。流しには二日分の洗い物が置かれている。ため息が出た。

ぼくの帰宅を専業主婦の母さんが迎えてくれなかったのはわけがある。信じないかもしれないけど、前作以後ぼくの家はむちゃくちゃになった。二ヶ月前母さんが家を飛び出して実家に帰っちゃったからだ。ぼくは今父さんと二人暮らし。ときどき兄貴が帰省する。

そう言えば、ぼくはみんなにあやまらなきやいけないことがある。昨年夏に書いた「はてなの透明な叫び」で、ぼくが一人っ子のように書いた。実はあれは嘘だ。

小説の効果を考えて一人っ子にした。本当はぼくには四つ違いの兄がいる。兄はこの春大学三年生になった。ぼくはもちろん高二に進級した。

そうそう、それにもう一つ嘘がある。前作で書いた従姉の家の庭に首を切断されたトム・キャットがいた、ってところ。覚えているだろうか。実はあれも嘘だ。

でも、信じてほしいんだけど、死骸は本当にあったんだ。ただそれは猫じゃなくてネズミの死骸だった。もちろん首は切り離されていなかった。しかし、ぼくはそれを見たとき

ぴーんとひらめいた。そこで神戸の小学生惨殺事件、透明な存在、従姉の両親の離婚、彼女の錯乱、猫、切断、ムンクの叫び——っていう風にクライマックスに持って行こうと思ったわけだ。

あの作品を従姉に見せたら猛烈に抗議された(当然か)。絶対に発表しないことと念を押されたんだけど、そのときはもうS先生に原稿——て言うかフロッピーを提出した後だった。

迷ったけれど、せっかく大作をものしたんだし、従姉は見ないだろうと、文化祭の限定一四〇部に出した。従姉には内緒にしといたんだけど、どうやら回り回ってY高文芸誌文化祭号を見てしまったらしい。ある日のメールでものすごい非難の「雨アラレ」。

事実と違う点(猫の首の切断など論外、他にもあのとき私は真っ赤なミニスカなんか、はいていなかった)に始まって、作品の矛盾点やおかしな表現を微に入り細に入りって感じで四ページにわたって痛烈に批判された。「私小説っていうのは事実を勝手に作っちゃだめでしょ」とか、「その割に観念的と言うか、ちっとも現実感がない小説だ」とか、ほんと辛辣。その批判たるやS先生以上で、ぼくはその後一ヶ月は落ち込んでしまった。

そして、従姉はメールの最後に「後書きによると書きを書くようだから、次の作品でこの件の真実を述べておくこと。もし書かなかったら絶交(!)だかんね」とあった。

だから、今ここで真実を明かしておくというわけだ。もちろん従姉のトムキャットは健在です。ただ、今はもう飼われていない。去年の九月彼女とお婆さんはZ市のマンションに引っ越した。そこはペットを飼えなかったからだ。トムキャットはお婆さんの知り合いに引き取られた。……ごめんね、のん子(仮名——仮名にするしかないもんな)。

そうして数日後のメールで、のん子はさらに「あなたがあんなもの書くようだったら、私だって報復小説を書くからね。何よエッチな想像しちゃって」と追い打ちをかけてきた。

ああ、全く女の子ってちっともロマンティストじゃない。従姉へのほのかな感情も誇張だったのに。それにしても一体どんな報復小説を書いてくるのか。楽しみなような、怖いような複雑な気持ちだ。

それから半年近くなる。そろそろ出来上がっているんじゃないだろうか。

ぼくは一時間ほど部屋のベッドで寝ころがった後、台所で夕食の支度を始めた。夕食と言ったってさっき買った「ほか弁」だ。お茶をわかすのはめんどうだから牛乳で済ます。

父さんは帰りが遅いので外食が多い。食費は渡されているので初めはぼくも外で食べた。するとラーメンライスが一週間続いたり、焼き肉定食が五日間、次に餃子定食六日間……などと、どうしても昨日と同じ店に行ってしまう。何か餃子もあきたなあ、と思って指折り数えてみると、いつの間にか六日が経過しているというわけだ。だから、最近は惣菜類を買ってきて家で食べるようになった。時にはごはんを炊くこともある。

でも、ごはんを炊いたり目玉焼きとか野菜炒めとか作るのは、片付けが超めんどくさい。流しに洗い物がたまり始めて二、三日後、父さんに叱られるはめになる。

自分でやってみると、母さんが料理したり洗い物をするのがいかに大変かってよくわかった。だから、料理も嫌になるとほかほか弁当で済ますことが多い。今日も唐揚げ弁当を買ってきた。

一キロ先にあるほか弁の唐揚げ弁当はジューシーだから好きだ。でも、一人で食べるのはあまりおいしくない。こんなときは出ていった母さんを恨みたくなる。ホントに大人って勝手なんだから。

母さんがなぜ実家に帰ったのか。ぼくにはよくわからない。兄貴の話によると全面的に父さんが悪いらしい。確かに母さんは専業主婦で、外を出歩くようなタイプじゃなかったから「フリン」じゃないだろう。父さんのいわゆる「ウワキ」ってやつだろうか。

しかし、母さんが家を出てもう二ヶ月になる。何だか母さんは戻ってくる気配がないし、父さんも呼び戻す——て言うか、迎えに行くような雰囲気もない。

この間父さんは「性格の不一致かな」なんてぼつりと言っていた。このまま離婚してしまうのだろうか。ぼくはただ飯が困るから早く帰ってきてよって感じだ。でも、こういう考え方って母さんはお手伝いじゃないんだから、たぶん母さんの人格を認めてないことになるんだろうな。

冷えた唐揚げ弁当にいわゆる「舌鼓を打っ」てぼくは部屋に戻った。パソコンを立ち上げ、一週間ぶりにサーバーのNを開く。予感通り従姉のメールが届いていた。

やあ、元気？

ちょうどお風呂入って夕食が終わったところかな。私のお母さんは今日も遅いので私一人でお夕食。おしたしに野菜サラダ作ってメインは鯖の煮付けってところよ。

君はどう？

どうせどっかのコンビニほか弁で済ませてるんじゃない？

だめよ、いつまでもママやパパを当てにしてちゃ。自立してしっかり栄養バランス考えた食事摂らなきゃ。

ところで、前に言ってた私の小説、で・き・た・わ・ヨ。

今度見せるからどっかで会いましょう。

今週の土曜（〇〇日）、M駅前の喫茶店「A」、二時でね。のん子

相変わらずの文面だ。言いたいことべらべら喋って、こっちの都合はちっとも考慮してくんない。これが約一年前両親の離婚で涙ぐんでた人だから、女の子ってのはホント立ち直りが早い。ぼくはすぐに返信メールを打った。

了解。ホントにのん子は洞察力が鋭い。

風呂はまだけど、ぼくの今夜の晩飯はほか弁の唐揚げベントーでした。

でも、うちの近くのほか弁は種類も豊富で栄養バランスいいし、特に唐揚げ弁当はジュ

ーシーで、うまいです。

うちの父さんも帰宅が遅いので、一人で「さびし〜く」食べました。

な〜んてネ。

ところで土曜日の件、了解しました。M駅前の茶店にて

ぼくの頭をちらっと文芸部のマーヤの姿がかすめた。でも、頭を振ってメールを書き上げた。それから送信しようとしてメールの日付を見たら、彼女は五日前に発信していた。これがEメール唯一の弱点だ。こっちがNを立ち上げ電話回線を繋がないと、メールが来ているかどうかわからない。これじゃあ「アンタが開くのが遅いんでしょ」と逆に怒られそう。

書き直そうかと思ったけれど、もう打っちゃったからいいや、とぼくは見ないふりしてメールを発信した。

その後ギターをつま弾いていたら、あっという間に十一時を過ぎた。さらに寝っ転がって小説を読み始めたら、これもやめられなくて夜更かししてしまった。結局風呂も入らず、寝たのは三時近かった。午前一時頃父さんが帰ってきたけど、ぼくは下に降りなかった。

翌日は土曜日。半ドン为学校を終え、M駅前の喫茶店「A」に行った。

のん子はもう来ていた。二時五分前くらい。彼女は待ち合わせ時間に遅れたことがない。

「A」はBGMに聞き慣れたクラシックを流すような、落ち着いた雰囲気 of の喫茶店だ。

のん子はS校の制服姿だった。学校帰りらしい。

「ゴメン、待った？」

「ううん、五分ぐらいかな。何にする？ わたしはコーヒーとケーキを頼んだところ」

「じゃぼくは……紅茶……だけ。コーヒーって苦手なんだ」

のん子はウェ이터に紅茶を注文すると、何も言わずにバッグから紙袋を取り出した。どうやら例の「報復小説」が入っているようだ。ぼくはちょっと暗い気持ちでそれを受け取った。

「じゃ、読・ん・で！」

のん子の命令は絶対——てな口調だった。

表題に「センチメンタル・フォーティーン」(何い?!)てあった。ぼくは恐る恐る読み始めた。

しかし、暫く読み進むとぼくはほっと一息ついた。それは報復小説どころか、意外と普通の自伝的小説だった。ぼくらしき人物も登場する。しかし、別に良くも悪くも書いていない。むしろちょい役っていったところだ。ま、のん子のぼくに対する意識ってそんなもんだらう。

読み始めて何度かあくびが出た。作品が退屈なのではなく(少しは退屈だったか……)、昨日の寝不足のせいだ。その度にのん子は睨んだ。

「なーに一真面目に読んでね」

「ごめん、昨日遅くまで起きてたもんだから眠くて仕方ないんだ。でも本気で読んでいま

す」それからぼくは目をこすりこすり、三十分程でのん子の作品を読み終えた。

のん子らしい女の子の中学二年から三年にかけてのことが書いてある。原稿用紙にして約六十枚程。内容としては仲好しだった彼女の友人とのちょっとしたいさかい、そしてのん子と両親との関わりが中心だった。あの頃は良かった式の典型的な過去回想私小説。題名通りちょっとセンチメンタルな作品だった。うちの文芸部にはこういう感傷的で湿っぽい作品なんか皆無だ。

「自分のことを書いてみてわかったことがある。ありがと……」

ぼくが読み終わると、のん子は礼を言った。何だかえらく素直だ。

ぼくはぼそぼそと感想らしきことを喋った。のん子は時折うなずきながら（いつの間にかスパゲッティも食べながら）聞いていた。

しかし、彼女は別にぼくの感想を欲しているようには見えなかった。書くだけで充分、そんな感じだった。

ぼくだって評論家じゃないからうまく批評なんかできない。文芸部顧問のS先生だったら、的確な批評をしてくれるかもしれない。そのことのん子に言った。そしたら意外にものん子は文芸部の先生や部員に読んでもらってもかまわないと答えた(自信家あ…！)。

「すみませーん。ツナのサラダ…ひとつ」のん子が大きな声で注文した。

そのときぼくはテーブル上のお皿の山に気づいた。のん子はまだ昼飯を食べていなかったのか。それにしても茶店に入ってから一体これで何度目の注文なんだ？

最初は確かケーキとコーヒーだった。次いでアイスクリームにレアチーズケーキ。「お腹減った」と、スパゲッティを注文。そして「野菜も食べなきゃ」と、これからツナの(!)サラダだ。ふと気づくと、テーブルの上はお皿の山になっていた。

ぼくはまじまじとのん子の顔を見つめた。

「のん子ってこんな大食漢だったっけ？」

彼女はフォークを口に入れ、ぐるぐる回しながら改めてテーブルを見回した。

「あら、そう言えばいつの間にかたくさん食べちゃったわね。この辺でやめとこうか。大丈夫よ、心配なくて。あなたに奢ってくれなんて言わないから」

確かにぼくの身勝手小説の「モデル料よこせ」なんて言われたら、かなり悲惨だと思った。でも、ぼくはのん子の身体の方が心配だ。のん子は運ばれたツナサラダをおいしそうに食べ始めた。

のん子は別に太っているわけではない。身長一五五前後、体重はたぶん四五～五〇ぐらい。どちらかと言うとスリムな方だ。やせの大食いって言葉もあるから、のん子もそんなタイプなんだろうか。

「ところで、あなたの所どう？ お母さん、戻って来た？」

のん子は話題を変えた。彼女はぼくんちの事情をよく知っている。何てったって彼女のお母さんとぼくの母さんは姉妹だ。

「うん。母さんが出ていってもう二ヶ月になる。全然戻ってくる気配がない。父さんもあ

んまり話しないし。というより父さん、仕事で帰ってくるのが遅くてじっくり聞くこともできないんだ。何だかこのまま離婚しちゃうのかなあ」

ぼくの答えは歯切れが悪い。事実両親の状況は曖昧なままだ。

「うちもそうだった。うちの場合は先にお父さんが出ていったんだけど、その後離婚まで早かった。正式に決まったのは三ヶ月後だもん。私に知らされたのはその後で……そりゃあ薄々気づいてはいたけど、急にお父さんとお母さん、どっちの養育権を受けるか——だもんね。二人の離婚に子どもの意志とか気持ちなんてノータッチって感じイ？」

「そう……うちも離婚かなあ。いまだに信じらんないよ」

「ホント私だって……。ああ、やだやだ。お父さんはお父さん、お母さんはお母さん、わたしはわたし。それぞれにそれぞれの生き方があるのよ。だから、きみも両親の離婚なんかには振り回されちゃだめ……話題変えよ。文芸部はその後どうなの？」

のん子からこの話題持ち出しといてそりゃないぜと言いたかった。でも、ぼくは最近の文芸部のあることないこと、面白そうなことを話し始めた。

のん子はよく笑いながら聞いていた。途中彼女はケーキを(またァ?!), ぼくはつられてアイスクリームを注文した。

二時間ほどしてぼくらは茶店を出た。のん子は言った通り自分でお金を支払った。ぼくの紅茶とアイスクリーム代も「呼び出したおごりよ」と言って出してくれた。

彼女の財布には一万円札が数枚入っていたので、ちょっとびっくりした。しかし、彼女のお母さんは会社の部長クラスだし、お金持ちだから別に不思議じゃないかもしれない。

そして、S喫茶店の前でぼくらは別れた。彼女の作品はしばらくぼくが預かることになった。

[2]

翌週の火曜(火、金が文芸部の定例活動日だ)、放課後早めに部室に行ったら、綾部摩耶さんが一人だけいた。ぼくらはマーヤって呼んでいる。わが文芸部は最近ペンネームで呼び合うことが多い。ぼく幸二は「はてな」だ。

文芸部の部室は部室と言うより、廊下隅っこをロッカー二台で仕切ったコーナーって感じだ。Y高四階ワープロ室前の廊下にある。ぼくら文芸部はワープロ室のパソコンを使って作品を作る。つまり、作品はパソコンのワープロソフトで打つことになる。

作品が完成したら原稿用紙ではなくフロッピーを先生に提出する。先生は部員の作品を編集(順不同に並べ替え)してフロッピーを返却する。ぼくらはそれをプリンターで印刷して製本するというわけだ。その後合評という形で活動を行っている。

五月末の中間テストが近づいていたので今週で部活動は最後となる。ぼくは従姉の作品をかばんから出してマーヤのそばに行った。彼女は単行本タイプの漫画を呼んでいる。少女漫画のようだ。

ぼくはちょっと胸がドキドキした。どうも、女の子と一対一で話すのは苦手だ(単なる雑談なのに……)。ぼくは違う話題から入った。

「マーヤ。さみしさをテーマとした文化祭の作品だけど、もう構想できた？」

彼女は漫画から目を離さず、うつむいたままで答えた。

「ううん…まだ。文化祭まで間があるし、夏休みに集中して作るつもり」

「そうだね。それまで課題はほとんどスケッチ・タイプってことだしね」

S先生によると文化祭まで小説タイプの制作は、テーマ「さみしさ」だけで、一学期の間は全てスケッチタイプで活動するそうだ。

中間試験最終日に近くのH公園を訪ねて「公園を描く」活動(この課題にはある重大な秘密が隠されていた)、そして六月第二週の土曜日に埼玉の「丸木美術館」を訪ねて「丸木美術館を描く」をやる予定だ。

そのとき「丸木美術館で何があるんですか」と部員から質問があった。先生によると、広島原爆関係の絵があるそうだ。「君らは修学旅行が北海道だから在学中広島・長崎に行くことはない。本当は広島か長崎に連れて行ってそのことを書きたいんだが、無理だからせめて丸木美術館に行ってみようと思うんだ」と言っていた。こういうのってやっぱり反論し辛い。

「ところで、マーヤは丸木美術館で行ったことあるの？」

「ううん、ないよ。はてなは？」

「ぼくもない。丸木美術館なんて初めて聞いたよ。何だかあんまり行きたくないなあ」

「どうして？」

「どうしてって特に理由はないんだけど、広島とか長崎とか原爆って聞くと、もうそれだけで、何にも言えない感じじゃないか。原爆は悲惨です、核はいけません、平和が大切です——て感じ？ 原爆の絵にしたって行って見たことをそのまま書いても仕方ないだろう？ フィクションにもし辛いと思うし。今からちょっとうんざりしてるよ」

「そうね、でもインドが核実験をやった直後だし、タイムリーな企画かもしれないじゃない」

マーヤったら漫画を見ながらそんなことを言うので、ぼくはちょっと驚いた。彼女の脳みそは二分割されているのだろうか。

確かに五月初めのインド核実験成功以来、世界で日本で反核の運動が起こっている。インドの隣国パキスタンも核実験を強行しそうなことがニュースで報じられていた。

しかし、鈍感なぼくには丸木美術館とインド核実験が結びつかなかった。漫画を読みながら、こんなことを言えるところがマーヤのすごいところだ(こっちを見て喋らないのは、ちょっと失礼だけど)。

マーヤは時折ずばりと切れることを言う。合評なんかで彼女の一言が部員を驚かせ、S先生をたじろがらせることさえある。投げやりな面と妙にハイテンションなところもある。怖いもの知らずといった感じだろうか。長い髪と大きな瞳がちょっと魅力的な女の子だ。

ぼくは去年の秋彼女に振られたことがある。文芸部の課題「博物館を描く」のとき、一足先に行って見ようよとナシつけたのに(言い出しっぺは彼女だ)、見事にすっぽかされたからだ。

翌日「なぜ来なかったの」と聞くと、彼女はそっけなく謝っただけ。ぼくは「博物館を

描く」本番でその件をフィクションみたいにして「失恋博物館」と題して書いた。

ぼくの作品は合評で結構好評だった。しかし、彼女は特に何も言わなかった(それも当然か)。ぼくは作品ラストで「中庭に枯れた山桜の木が一本あった。春になったらまた彼女と一緒に来たいな」とほのめかしておいた。

それなのに、今年の春は何もないままだった。ぼくも何となく誘いづらかった。そのうち花見のシーズンは終わってしまった。あの山桜、中庭でひっそり花を咲かせていただろうに……。

やがて部員が徐々に集まり始めた。ぼくは従姉の作品をマーヤに渡し損ねた。まず、マーヤに真っ先に読んでほしかった。ぼくは明日にでも、マーヤのクラスに届けることにした。それから男連中といつもの馬鹿ッ話を交わしながら、ぼくはワープロを打った。

いとこの「センチメンタルフォーティーン」はマーヤに読んでもらった後、S先生と部員連中にも回覧した。一人かなり辛辣な批評があったけど、大多数はふーんて感じだった。

S先生はうまく書けていると誉めマーヤも好意的だった。ぼくはそれを適度にアレンジして彼女にメール送信した。のん子からはその後何回かメールが来た。彼女は今年三年だから受験勉強で忙しいようだ。

Y高は中間試験ウィークに突入した。試験前十日間はクラブ活動は中止、試験勉強に精出さなけりゃならない。しかし、真夏のように暑かったり、雨がしとしと降って妙に寒かったりと、初夏とは思えない嫌な気候が続いていた。ぼくはおかげで体調を崩して試験勉強ができなかった。でも、体調を崩したのは夜更かしが大きな理由だ。しかも、夜更かしで勉強していたわけではない。音楽関係の授業と試験が憂鬱だったからだ。

Y高には音楽コースと美術コースがある。ぼくは音楽コース(略して音コー)の生徒だ。今となっては何で音コーにと思えるほど、ぼくは音楽系じゃない。中学一年のときギターを独学で始め、それがちょっと得意だった——それが志望理由か。

父さんは反対だったが、母さんは賛成してくれた。母さんの応援に勢いを得てぼくはY高音楽コースを受験した。内申書の成績は全然問題なかったので楽々合格できた。実技試験ではクラシックギターをやった。

しかし、入学後コースの他生徒の様子を知ってぼくは文字通り「愕然」とした。専門はみんなピアノが圧倒的で、その次が声楽、しかも小さい頃から先生について習っている。「将来? もちろん音大希望よ」てな女子生徒がごろごろいた。クラシックとは言え、ギターなんてぼく一人だった。

音コーは一年に二度校内発表会があり、視聴覚教室で行われる。ぼくは当然ギターで出場した。一回目は「禁じられた遊び」を弾いた。緊張して何度かとちった。拍手はお情けのように思えた。

見に来た母さんは誉めてくれた。しかし、母さんもぼくも他生徒のハイレベルに驚きあきれていた。ピアノなんかモーツァルト、ベートーベン、ショパンといった大作をばんばん弾きこなす。自分と全く違う世界という感じだった。

今年二月に二回目の発表会があった。そのときは母さんに通知を渡さなかった。ぼくは辛うじて「ラグリマ(涙)」を弾いた。これは懸命に練習したので、まずまずの出来だった

けれど、正直泣きたい気持ちだった。

ただ、一年のときはコースをさほど意識することはなかった。一般コースの生徒とごちゃ混ぜになっているし、科目もほぼ同じだから。

ところが、二年で音コー生だけのクラスになると、そうは行かなかった。二年になって音楽関係の科目が急に増えた。ぼくが苦手なのは歌とソルフェージュだ。ギター伴奏でフォークやポップスなんかを歌ってる分にはいい。けれど、正式に歌うとなると、ぼくは歌が本当に下手くそだった。

そして、ソルフェージュと言って先生がピアノを弾き、それが何の音かを当てる(正確には音を聞き分けて五線譜に書き留める)授業になると、もうさっぱりだった。ぼくは中学の時ギターで曲を作ったりした。中学校三年間で音楽は一応五(三年の時は九)だったし、楽譜の読み書きには自信があった。

しかし、ギターの音とピアノの音は全く違う。ぼくはソルフェの小テストでほとんど一ケタ得点しか取れなかった。しかも音楽コースの連中は他科目も成績がいい。ぼくはクラスでほとんど最下位だ。コース生徒四〇人中男子は三人だけ。AとSもぼくに似て劣等生の方だ。

でも、二人のピアノの腕はかなりのレベルだ。彼らはまだピアノに救いがある。AとS、それにぼくは一応友達関係だけど、親密ってほどではなかった。どこか波長が合わないんだ。

ぼくは……ものすごい劣等生で、それをみんなに気づかれるのが嫌で、少しでも自分の優越感を満足させようと、みんなの間を縫うようにして生きている。ぼくはクラスで浮いている。誰ともコミュニケーションできない——いつからかそんな思いにとらわれるようになった。夜更かしが多くなり、学校では猛烈に眠い。二年になってぼくは授業で机に突っ伏したまま寝ていることが多くなった。起こす先生は少なかった。

五月下旬、二年になって初めての中間試験が始まった。ぼくはただ義務的に登校するだけで、ほとんどの試験で問いに答えられなかった。ろくに勉強しなかったし、毎夜小説ばかり読んでいたのだから当然だろう。勉強したのは国語と少し興味のあった日本史ぐらいだ。

中間試験が始まって二日後母さんから電話があった。どうしてるとか、ごはんちゃんと食べてるとか、勉強してるとか細々とした話の後、もし父さんと離婚することになったら、どっちにつくかと言われて困った。とうとう来たかと思った。

ぼくが返事をしぶっていると、母さんは「やっぱり幸ちゃんも父さんの方に行くのね」と言って泣き始めた。たぶん兄が父さんの方に行くと言ったんだろう。ぼくはわからないと答えて離婚なんかしないでよと言った。母さんは電話の向こうで泣いていた。

中間テストは四日間で終わった。今までになく悲惨なテストだった。ソルフェージュはたぶん0点か2点だ。ぼくのバイオリズムは下りカーブの最下点にあってずっと憂鬱だった。

だが、昨日あたりから心の隅っこでわくわくそわそわするような気持ちも芽生えていた。

と言うのは今日午前中で試験が終了すると、午後一時から文芸部の「公園を描く」活動があるからだ。試験前S先生からこの課題の「秘密」が明かされていた。

それは同じ「公園を描く」でも、部員一人一人単独で公園に行くのではなく、今までと少しパターンを変えて「部員同士がデートしながら（デートォ！？）……それも含めて公園での一時間を描こう」という話だった。

部員連中はそれを聞いて「えーっ」とか、「ぎょえー」とか、かなり仰々しく叫んだ。ぼくももちろん叫びまくった。しかし、ぼくは内心ひそかに「ラッキー」と呟いていた。だってこれでお目当てのマーヤと堂々デートできるってことじゃないか。

先生はみんなの反応を見ながらにやにやしていた。
「ただし……カップリングは公平を期して(?)…くじ引きで決める (……)」と言った。
それじゃあ必ずしもマーヤに当たるとは限らない。そう思ってぼくはちょっと気が萎えた。

しかし、考えてみれば「デートして下さい」なんて、とても口に出せない臆病なぼくにとっては五分の一の確率でも、マーヤとデートできる絶好のチャンスが与えられたってことだ。これはもう神頼みでも何でもしてラッキーチャンスにするべきじゃないか。

そのときぼくはそう決意した。だから、ここ数日マーヤに当たってほしいと祈るような心境だった(中間試験をさぼったのはそれが理由じゃないけど)。

部室でまずいパンを食って男連中と雑談を交わしていたら、もう午後一時だった。ぼくらはあわてて昇降口前の櫓下にとんでいった。S先生と女子部員が待っている。「一分遅刻の者、千円」先生恒例の罰金宣告だ。
さらに遅れて来た男子部員が「ええっ！」とか「うっそー！」と叫ぶ。でも、今まで罰金を取られたことは一度もない。

昇降口前の中庭はちょっとした広場で大きな櫓の木が二本立っている。五月の爽やかな風が若葉をそよがせている。今日は文句なし五月晴れの一日、むしろちょっと汗ばむくらいだ。

先生がもったいぶった口調で切り出した。
「みんな集まったか。BとWが来られないのでちょうど男子五人に女子五人。五組ペアが作れる。じゃあくじびきを始めようか」
先生は手にしたくじ入りの袋をみんなに見せた。どうやら封筒の中にくじが入っているようだ。

部員連中にちょっと緊張が走った。普段ハイ・テンションな者も静かで、何かしらいつもと雰囲気が違う……と思ったのはぼくだけだろうか。ぼくもどっちかというとなりがちだった。心中マーヤに当たってほしいな、でもまあここまで来たらどうでもいいか……みたいな、いつもの弱気の虫も顔をのぞかせていた。ぼくはどうも失敗したり、うまくいかなかったときの言い訳を先にこしらえる癖がある。

先生がみんなを見回して口を開いた。
「まず男女それぞれ順番決めのじゃんけんをする。封筒の中には1番から5番の札が入っ

ているので、男女どちらかがそれを引いて相手を決定する」

そこで男女それぞれじゃんけんで順番を決めた。ぼくはじゃんけんに負けて五番目になった。何とマーヤも五番目だ。

ぼくはこのままだったらいいのと思った。だが、これからくじを引くので、彼女に当たるとは限らない。

その後部長（男子）と副部長（女子）のじゃんけんで封筒のくじを引くのは女子になった。結局、ぼくはもちろん五番目のマーヤもくじを引くことはない。残り物に福があるのか、あるいはぼくが先に他の女子部員に当たるか。どっちにしてもぼくはただ待つしかない。

「そうか。くじは五組分作ったけど、考えてみたら四組分あれば良かったんだな」なんて先生はのんびりとしたことを言った。

そんなことはどーでもいいんです。ぼくとマーヤがペアになるかどうか、それが問題なんです……とぼくは心の中でつぶやいた。

一組目、一番目の女子がおそろおそろ封筒に手を入れる。引いたのは「1」の札。

当人たちは何だか静か。周りもシーン。（ぼくはほっ……）

二組目、二番目の女子は「2」の札を引いた。二人遠慮がちに「えーっ」。

周りが「何だよ1—1、2—2じゃんか」と、中ぐらいの盛り上がり。（ラッキー！）

三組目、「まさか3じゃないでしょうね」と言って引いた札が「3」。

これは男女ともに「ぎょえーっ、げっげっ」と叫ぶ。

「何でお前なんだよ！」「何であなたなんかと！」と二人同時にののしり合った。

先生の「おいおい、まあまあ。却って二人は本命ってことじゃないのか」で、さらにぎゃあぎゃあ、わあわあ。

ぼくは仲間と笑いころげながら、やった(!)あと一つ、神様頼みますと祈った。

そして、運命の四組目。四番目の女子が封筒からゆっくり札を取り出した。

「あっ」と言って彼女は札を落とした。

ぼくは地面に転がった紙片の番号をしっかりと見届けた。「4」だった。

ぼくは神様の存在を信じた。

またひとしきりぎゃあぎゃあ、わあわあがまき起こった。

しかし、これで決定だ。「天にも昇る」気持ちってこういうときを言うのだろう。

ぼくは内心の喜びを男連中に悟られまいと、しっかり抑えた。

ぼくとマーヤの五組目決定は儀式も終わって付け足しみたいなもんだから、盛り上がりはなかった。ぼくはその分妙な演技をしなくて済んだ。

マーヤの方を盗み見ると、何だかつんとすまして隣の女子と言葉を交わしている。ぼくと一緒に行くのは嫌なんだろうか、なんて不吉な気持ちが頭をかすめた。

「じゃあ、これで決まったな。偶然とは言え1から5まで同じ番号同士になるとはね。じゃんけんで良かったってことか」と先生が言った。

いやいや、そんなことはありません。このくじは大切でした、とぼくは心の中でつぶや

いた。

[3]

先生の注意を受けた後で文芸部即席カップルは一組目から時間差でH公園に出発した。

公園に行くには二つのルートがある。正門を出て右に進み「K生活センター」の外周を回って行く道と、正門を左に進みテニスコート沿いのジョギングコースを通る道だ。ジョギングコースに行く方が近道だった。歩いて五分ちょっと。

みんな正門を出ると左に向かっていた。最後に先生に見送られてぼくとマーヤも正門を出て左に曲がった。

ぼくはとりあえず野球場と「Gアリーナ」の向こう、海賊船みたいな船やちんちん電車のある広場まで行こうと思った。

Gアリーナってのは冬はスケート場、夏はプールになるでっかい体育館みたいなやつで、市営野球場の隣にある。今は五月だからプールになっているはずだ。

ぼくとマーヤはつかず離れずで歩いた。一応並んで歩いてはいたけれど、どうもぼくの歩みはぎくしゃくしていた。彼女はスムーズに歩いている（ように見えた）。

ぼくの方とはともすると右手と右足が同時に前に出そうになる。我ながらちょっと情けない。もしも去年博物館に一緒に行っていたら、こんな風になったのだろうか。いや、あんなことがあったから、こんなにぎくしゃくするのだろうか。

テニスコートのそばを歩いているとき、ぼくはあることを思いついた。Gアリーナの方が穴場じゃないか。ぼくはマーヤに言った。

「先に……Gアリーナに行かない？」

マーヤは返事をしない。

「連中はみんなあっちの広場に行くと思うんだ。だから、時間をずらした方がいいんじゃないかな。それにぼく、Gアリーナってまだ入ったことないんだ」

芝生や向こうの広場まで行くと、他部員の即席カップルに出くわす可能性が高い。ぼくは他の連中と会いたくなかった。Gアリーナなら彼女と二人だけで語るには絶好の場所だ。

マーヤは「いいよ」って言った。それでぼくらはGアリーナを目指した。

散歩中のおじいさんおばあさん、ジョギング中の若い人などが野球場横の通路を行き来している。通路は砂地だからざくざく音がする。チリーンとベルが鳴って試験を終えたY校生が何人か、自転車でぼくらを追い越す。

何だかちょっとこそばゆい。知った奴らに見つかったら何て言われるか。マーヤだって同じことを思っているのではないか。だから、何となく一緒にいるような、離れて歩いているような間隔なんだ。ぼくより彼女の方がこの即席デートを気にしているのかもしれない。先生もどうせならもっと遠くの公園にしてくれれば良かったのに……とぼくは心中ぶつくさぶーぶー呟いていた。

数分もしないうちにぼくらはGアリーナに着いた。白い建物で正にでっかい体育館だ。

中はちょっと薄暗くてひんやりしていた。現在プール交換の作業中でまだプールになっていないようだ。

ぼくらは入って何となく右側に進んだ。待合室のような広いスペースがある。若い女性四人がソファに座ってテレビを見ていた。一人がちらりとこっちを見た。

その先は壁全体が大きな透明ガラスの窓になっている。道の向こうに樹木が並んで若葉が茂っていた。ガラスの前にソファ仕立てのベンチがあったので、ぼくとマーヤはそこに座った。

すると外の大木のそばに二組の文芸部即席カップルがいるのが目に留まった。何だか所在なげに立っている。マーヤがあろうことか手を振った。向こうの女の子も手を振って応えた。まっ仕方ないか……。

結局二人だけで語るというぼくの思惑は失敗に終わった。なぜかGアリーナの中にぞろぞろと部員全員が集まってしまったからだ。

ぼくはちょっといらついた。話が違うじゃんと思った。しかし、自然に集まったんだから文句は言えない。中には「やっぱりこうなるんだよな」なんて言ってる男もいる。

暫くの間男子は男子、女子は女子で固まってしまった。そのうち漸く一組また一組とペアになって外に出て行く。

ぼくもマーヤを促して外に出た。そして木々に囲まれた広場に出た。母子連れが方々のベンチでくつろいでいる。幼子がちんちん電車や一人掛けのシーソーに乗っている。

高さ数メートルはある木製の海賊船には誰も登っていなかった。

ぼくとマーヤは海賊船近くのベンチに腰掛けて周囲を見渡した。だが、部員連中がまたこの広場に固まりそうになったので、ぼくは再び彼女を促して立ち上がった。

「あっちの芝生の方に行ってみようよ」そう言うと、マーヤは黙って頷いた。

芝生の手前には東屋みたいな休憩所がある。大学生風の男女数名がたむろしていた。

一人の男が「ひゅーひゅー」と口笛ともつかぬ声を上げた。笑い声が起こった。

ぼくは顔が熱くなった。ぼくらをからかっているように思えた。でも、冷やかしは一度だけだった。マーヤはすまして、別に気にしている風に見えない。やっぱり女の子は強い。

こんもりとした木立を抜けると芝生の広場に出る。太陽の強い日差しが芝生を眩ゆく照らしている。芝はあまり伸びていない。それに昨日一昨日と雨が降ったので地面は乾いていない。芝生に座るのは諦めざるを得ないようだ。

ぼくらは広場を横切って木陰のベンチに腰掛けることにした。ベンチは数本の樗が乱立する真下にあった。葉を茂らした樗が大きな影を作っている。ちょっと汗ばむほどだったので、吹く風が気持ちいい。ここんどこ目茶暑かったり、雨が降ると肌寒かったりして妙な天候が続いていた。今日はホントに爽やかな一日だ。

この場所には他部員も集まりそうにない。こんな日にお目当てのマーヤと二人だけでベンチに座り、隣に座った彼女の息づかいを聞けるなんて、誰かの歌じゃないけど「幸せだなー」って感じだった。

ぼくらはそれからぼつりぼつりといろいろなことを話し始めた。暫く他カップルもやって来なかったので、かなり語ることができた。

「マーヤって兄弟いるの？」ぼくはそんな話題から入った。

「ううん、一人。お母さんとわたし、それにおばあさんの三人」

お父さんのことが出ない。聞こうと思ったら「はてなは？」とマーヤが聞き返してきたので亡くなったかどうか、聞きそびれた。

「ぼくんちは父さんに母さん、それと兄貴がいる。兄貴は今大学生だ」

父さん母さんが離婚の危機だ、なんてもちろん言えなかった。

「そう……」

それでもう話が途切れてしまった。こう改まって「デート」ってことになる、どうもぎくしゃくして話しづらい。部室だと何も意識せずすらすら話せるのに。ホントに不思議だ。

ぼくは話のネタを探した。いつかマーヤがバンドを作っているという話を聞いたことがある。ぼくはそれを思い出した。

「マーヤはバンド作ってボーカルやってるんだって？」

「うん。昔て言うか中学の頃だけど……今はメンバーが揃わなくてやってない」

「そう。マーヤは楽譜読めるの？ ピアノとかギターで音を確認しないで楽譜を見るだけで歌うってやつ」

「うーん、簡単な曲だったらできるかな。シャープとかフラットがたくさんついたやつだと無理だと思う」

「そう、すごいね。じゃピアノの音聞いてそれが何の音かわかるんだ」

「ソルフェージュのこと？ それはピアノをやった人だったら大抵できるんじゃない。基本の調さえ言ってくればだいたいわかるよ」

ソルフェージュの言葉を聞いてぼくはつい自分のことを話し始めた。

「いいよなあ。それができないからぼくは音コーで苦労してるんだ。ぼくはやっぱりコースに合っていないよ。歌は下手だし、ソルフェなんかほとんど0点だもんね。ぼくは音コーなんかに来るべきじゃなかったんだ。ぼくは人に誇れるものが何ひとつないって感じだよ。少しだけあるとしたら、ギターやって作曲が少しできることくらい。でも、これだって自己流で土台のないものだ。創作にしたって辛うじて書いているだけで下手くそだし。以前誰かが居場所がないって書いていたよね。ぼくも同じなんだ」

人に言いにくいことだったのに、話し始めるとぼくは意外と素直に自分の悩みを語っていた。相手がマーヤだからだろうか。ただ両親の離婚についてはさすがに話せなかった。まだ決まった訳じゃないし……。

「だめだよ、そんなこと考えちゃ。みんなあるがままでいいんだよ。何でそれ以上を求めるのさ」

「あるがまま？」

「そうだよ。人に誇れるものなんかなくっていいじゃん」

「そうかなあ。一つもないってのもなんかみじめだよ」

「大丈夫。自分でないって決めつけているだけ。そのうち見つかるよ」

「うん？ じゃ、なくていいと言いながら、やっぱり何か一つはいるってことじゃないの？」

そしたら、マーヤは笑いながら言った。

「そっかァ…そうだね。でも、わたしが言いたいのはあるがままってこと。あるがままが一番いいんだよ」

「そうかなあ……」

「それに作曲ができるなんてすごいじゃない。充分人に誇れるものだと思う。どんな曲を作るの？ 詩は？」

「詩は難しくて付けたのは少ないんだ。ぼくには詩の才能もないよ。曲の方はロック系と言うよりフォークとかポップスって感じかな。ゆったりしたのが多いんだ」

「ふーん、今度聞かせてよ」

「うん。もし詩も併せていいのができたら、マーヤ歌ってくれる？」

「いいよ、任しといて」

マーヤはあっさり承諾した。結構歌に自信があるのかもしれない。

ぼくはマーヤが歌ってぼくがギターで伴奏する場面を想像した。わくわくした。

ギターをもっと練習しなきゃと思った。

「マーヤはピアノとか歌が得意そうだね。どうして音コーに入らなかったの？」

「そうね。音コーに入っちゃうと、その先が限られちゃう感じじゃない。私のはあくまで趣味だし、大学に行くとしてもまだどこに行くか全く決めてないし……だから普通科の一般コースでいいと思ったの」

「そうか……そうだよなー……」

ぼくも本当はギターを趣味として考え、音コーに入学したんだ。普通科で大学受験のための勉強ばかりするのが嫌だということもあった。でも、音コーに入ってみて結局はコースも音大受験を目的としていることがわかった。そして、ぼく自身の心の奥深くを探ってみれば、あわよくばギターでって気持ちもあったと思う。「井の中の蛙」ってこうのを言うんだろう。

コースに来て自分の実力がよくわかった。自分のギターでプロになるとか音大に行けるなんてとんでもなかった。もしかしたらこんな思いが二年になったぼくをいじけさせていたのかもしれない……。

ぼくは空を見上げた。晴天の空に白く薄い雲が渦巻くように流れている。風も爽やかでいい気持ちだ。啄木の「不来方(こずかた)のお城の草に寝ころびて」の歌を思い出す。

本当は芝生に寝ころんで空を見ながら話をしたかった。でも、マーヤにいろんなことを打ち明けて少しだけ心が軽くなったような気がする。

それからぼくらは他愛ない雑談を交わした。ふと気づくと出発してから小一時間が経っていた。他カップルはどこに行ったのか、誰もこっちに来ない。もう学校に戻ったのかもしれない。

この即席デートは一時間から一時間半という約束だった。ぼくはマーヤに（遠回りになるけれど）「公園の反対側の通りに出てK生活センターを一周して学校に戻らないか」と提案した。マーヤは同意してくれた。

ぼくらは先ほどの広場に戻らず、Gアリーナ脇の道を辿っていった。そして、数分で公園から表通りに出た。歩道の桜並木は今ではもう全て葉桜となっている。

ぼくらはその通りを歩いて生活センターを目指した。このころになるとぼくはぎくしゃ

くした歩みから解放されていた。

歩道の側の鉄条網にはきれいな紫色の花が咲いていた。茎は細い蔓状で網に絡みついている。大ぶりの六つの花卉は水仙の花びらに似ていた。

野生なのか植えられたのか。それは木にも這い上がって数メートル間隔で見られた。これまでそんな花を見たことがなかった。

「きれいな花だね」

ぼくは立ち止まって花びらを触りながら言った。

「それね、てっせん——て言うんだ」

マーヤは花の名を知っていた。ぼくは彼女の物知りに感心した。

「てっせん？ どんな字を書くの？」

しかし、マーヤも漢字は知らなかった。そして、この花がK生活センターの周囲一帯に咲いていること、俳句をやっているおばあさんに名を聞いたら「てっせん」と教えてくれたことなどを語った。

「不思議なんだよねこの花。秋でも冬でも春でも一年中咲いている感じなんだ」

マーヤは妙なことを言う。ぼくは「そんなことないでしょ」と否定したけれど、彼女は間違いないと言い張った。ぼくは口を閉ざしてまた歩き始めた。

てっせんの花はK生活センター外周の鉄柵でもしばしば見かけた。白い花卉のもあった。

暫く歩いてぼくらは生活センターの正門前までやって来た。そのときぼくは何かしら唇が乾き始めた。心臓がどきどき高鳴った。センターの角を曲がると、もう学校の通用門が見えてくる。マーヤは部室に寄ってちょっと（ワープロを）打ってから帰ると言った。

ぼくはこのまま下校する積もりだった。そして、ぼくらは正門近くで「さよなら」と言別れた。

ぼくは家路につきながら、ほっとため息をついた。高ぶっていた気持ちが急速にしばんでいくのを感じた。自分の不甲斐なさになんと腹が立った。心の中で思っていた一言を口に出せなかったからだ。

ぼくはもしこのくじびきでマーヤに当たったら、「今度二人だけで会えないかな」と言おうと思っていたんだ……でも、ま、いっか。くじびきデートで初っぱなからそんなこと言ったら怪しまれるしな、とぼくは自分をなぐさめた。

帰宅後すぐに辞書を引いた。「てっせん」の欄には「鉄扇」「鉄線」の二つの漢字しかなかった。そして「鉄線」の項目に、

①鉄の針金、「有刺——」 ②キンボウゲ科の多年生つる植物。

初夏に、白または青紫の花を開く。 （「福武国語辞典」）

——とあった。

「てっせんて鉄の線だったんだ」ぼくは思わず声が出た。

ぼくは「てっせん」の漢字として「薔薇」とか「胡蝶蘭」とか、十数画の複雑な漢字か、神秘的なイメージの漢字を想像していた。まさか単なる鉄の線だとは思ってしなかった。

「てっせん」の細い蔓は鉄の線に似ている。だから、その名が付けられたのかもしれない。

しかし、あの色鮮やかな紫の花と、マーヤが呟いた「てっせん」の美しい響きに対して鉄の線とはあまりに落差がありすぎる。ぼくはそんなことを思った。

それからベッドに寝転がってぼんやり今日のことを振り返った。どんな風に「公園を描く」を書くか。くじびきのこと、広場でのマーヤとの会話、鉄線の花……頭の中はごちゃごちゃしていた。しかし、取りあえず思い出せる限りあったことをそのまま書こう、ぼくはそう決めた。

それからパソコンを立ち上げ「一太郎」を開くと、ぼくは「公園を描く」を打ち始めた。よく覚えているうちに書こうって感じだ。ハイテンションでほぼ事実通りに書きまくった。深夜二時頃完成した。

読み直してちょっと驚いた。えらくはしゃいでいる。ここ一ヶ月の精神的落ち込みと正反対のはしゃぎようだ。このときはまっいつかって感じで、最後に「強制デートはルンルン気分」と題名をつけた。

しかし、翌日もう一度読み返してこれをこのまま合評に出すのはまずいと思った。マーヤへの思いが露骨に出過ぎてるからだ。マーヤだって迷惑かもしれない。

ぼくは結局トーンをかなり下げ、マーヤとぼくの語りはほとんど描かず、情景描写に重点を置いた穏やかな作品に書き直した。鉄線の花が印象的だったので題名も地味に「てっせんの花」に変えた。

数日後の合評ではいろいろなパターンの作品が出た。フィクションにしたり、相手のことをずばずば言った作品があったけれど、概してみんな書きづらかったようだ。

ぼくの作品はごく普通の反応だった。ところが、マーヤは何とぼくを「大学教授」に見立てた「援助交際」みたいな小説に作り替えていた。しかも、教授は「死んでしまう」——ぼくはちょっと落ち込んだ。でも、マーヤにとってぼくって存在はどうせそんなもんなんだろうと思った。

[4]

それから二週間後六月第二週の土曜日、「丸木美術館」に行く日になった。学校は四週六休の土曜日なので休みだ。文芸部が埼玉まで遠出するなんて初めてのことらしい。

五月末にはインドに対抗してとうとうパキスタンも核実験を成功させた。ニュースでは、核の拡散を心配する声が流れている。

S先生によると、丸木美術館を訪ねる活動自体は核実験強行の時世でもあるし、いい活動だとすんなり許可が取れたらしい。先生が出張扱いになるのに手間取ったそう。出張にならなくても先生は自費で行くと言っていたが、数日前やっとOKになった。

その前夜ぼくが二階の勉強部屋でパソコンに向かってしていると、階下で「ただいま」の音がする。父さんが久しぶりに早く帰ってきたようだ。時計は九時半を指していた。

ぼくは下に降りた。父さんは居間のソファに背広姿のまま沈み込むように座っていた。酒が入っているのか、顔がちょっと赤い。

「おかえりなさい」

「おお、ただいま。勉強してるか」

「うん、まあ。今日は早かったね」

「仕事が一段落したし、明日は久しぶりに休みも取れた。どうだ、どっか行くか」

「いいよ、気ィ使わなくっても。それに明日は文芸部のみんなと丸木美術館に行くんだ。たぶん一日かかると思う」

「丸木美術館？ 何だそりゃ？」

「この間先生の通知見せて交通費もらったじゃない。丸木夫妻が描いた原爆の絵がある美術館だよ」

「そうか、そんなことがあったか。埼玉だっけ？ 原爆の絵……ね。わざわざ埼玉まで原爆の絵を見に行行ってそれでどうするんだ」

ぼくはだんだんいらつき始めた。何となく父さんへの反発心が芽生えてきた。このまま会話を続けていると、終いにはけんかを起こしそうだ。

「いいじゃないか、そんなことどうだって。クラブの活動なんだから。見学した後そのことを作品に書きだけさ」

「そうか。文芸部だっけ？ なんだかちょっと偏っているんじゃないのか。わざわざ埼玉くんだりまで、原爆の絵を見にいかなでもよさそうなもんじゃないか」

ぼくは父さんに背を向けた。「明日早いからぼくもう寝るよ……お休み！」

父さんには文芸部の活動とかぼくの気持ちを説明したってわかりっこないと思った。

勝手に母さんを追い出して仕事ばっかで、勝手に酒なんか飲んで酔っぱらって帰って来て、ホントに大人って勝手なんだから。

でも、父さんはそれ以上追求してこなかった。

「そうか……気をつけて行って来い。おい、ちょっと待て」

そう言って父さんは背広の内ポケットから携帯電話を取り出した。

「これ、持って行け。何かあった時は役に立つ」

ぼくは携帯電話を受け取った。使い古して汗がにじんでいるような感じだった。

「いいの？」

「うん。明日一日必要ないから」

「ありがとう。たぶん使わないと思うけど……」

「ま、そう言うな。向こうから掛かってきたときはこうやって……切ればいい。父さんあてだけど、気にしないでいいから」

ぼくはまさか父さんの彼女からかかりはしないだろうなってちらっと思った。でも、黙っていた。

「それから、父さんは夕方ちょっと出るから。晩飯はどっかで食ってくれ」

「わかった。ありがとう」

父さんの声はどことなく沈んで聞こえた。ぼくはもう少し話に付き合うべきだったかな、とちょっと反省した。でも、そのまま勉強部屋に戻った。そして、携帯電話をいろいろ触ってみた。明日これを持っていくかと思うと何だかわくわくした。

翌朝、文芸部員はM駅前の広場に午前八時三十分集合した。

空は梅雨空で曇っていた。S先生と部員は計八名参加した。ぼくらは小田急線で新宿、JRで池袋、そして東部東上線の急行に乗り換え、埼玉の森林公園駅に向かった。

森林公園駅には十一時過ぎに着いた。最初は美術館まで自転車で行く予定だったけれど、結局歩きになった。途中うどん屋で昼食を済ませ、なお三十分は歩いてやっと丸木美術館にたどり着いた。うどん屋を出たころ雨がぽつぽつ降り出した。

その後のことは合評に提出した作品をそのままここに掲載したい。

第十四回 「丸木美術館を描く」 課題作品

霊気を発する絵たち 久保はてな

細い描線。まるで素描のような絵。黒い線と燃え上がる朱。そして、無彩色の空間。折り重なり、逆さになり、奇妙に曲がった人間の身体たち。

赤い炎の中の女性と幼な子。水面に浮かんだ裸、裸、裸。女の死体をモッコに担いで運ぶ瘦せた男。道ばたで呆けたように座る男や女。抱き合って泣いているような姉妹。赤ん坊を抱いた女。赤ん坊は死んでいるのか。あるいは母親がこと切れているのか……。

全て物言わぬ人間たちの絵。それはぼくを嫌な気持ちにさせる。絵の中の人間は大多数女性。そして、子どもと赤ん坊。女性はほとんどみんな裸だった。そこにはギリシア彫刻の滑らかな白、ルネッサンス絵画のしっとりとした肌、印象派絵画の明るくふくよかな裸、そんな人間の美しさは微塵もない。

部屋の壁全面に掲げられた計八双の屏風絵。それが「原爆の図」だった。

ぼくは嫌だった。大人はなぜそれを強要する？ なぜそれを見せたがる？

ぼくらは戦争を知らない。原爆を知らない。それでいいじゃないか。「ヒロシマ」を、「ナガサキ」を、「原爆の図」を見ることによって、ぼくの中の何かは変わるのだろうか。変わりはしない。

先生が「原爆の絵がある丸木美術館を見に行こう」と言ったとき、ぼくは心の中で反発していた。ただそれだけのために、S市からはるばる埼玉まで行くなんて、とぼくは思った。

だが、ぼくの思いを大画面の絵たちはうち砕く。ぼくのうすっぺらな思いは絵によって蹴散らされた。等身大の裸像が屏風の中に張り付いている。

それは描かれたというより人がたが貼り付けられたかのように見える。苦しみと絶望の声が聞こえてきそうなニンゲンの絵だ。

もちろん声が聞こえるはずはない。もしここにうめき声が流れていたら、作り物だと思ってかえって安心したかもしれない。物言わぬ無音の世界だけに息苦しい。絵たちはぼくを圧倒した。ぼくの気を砕いた……。

丸木美術館にたどり着いたときは午後一時近かった。六月第二土曜日。梅雨入りして早二週間。この日もしとしとと冷たい雨が降っていた。

東武東上線森林公園駅を降りて一時間以上も歩き、土地の人に何度となく道を訪ねながら、ぼくらはやっと丸木美術館に到着した。美術館は表通りの道からさらに入った、こんもりとした林の中にあった。

入場券を買って入り口の扉を押す。中に入ると湿気と生暖かい空気がよどんでいた。矢印の順路は二階を指している。ぼくは狭い階段を二階に上った。部屋は薄暗かった。そして、巨大な「原爆の図」はそこにあった。

屏風一双は高さ二、三メートル、横幅七、八メートル。八つの画面から成っている。それは正に屏風。床から一段高いところに立った状態で置かれていた。部屋は二つに仕切られ、「原爆の図」はそれぞれの壁際に四双ずつ配置されていた。

部屋に入ったとき、もあっとくる空気が顔を襲った。冷房はかかっていない。どうしてこんなに薄暗いのか、見上げて訳がわかった。天井にあるのは小さな赤色灯だけで、屋根の中央が採光用のガラスになっている。今日は梅雨模様で小雨が降る曇天。それで薄暗いのだった。

そんな中ぼくは屏風の絵を一面一面ゆっくり眺めていった。暫くいると次第に息苦しさが増してくる。室内は暑くないし、寒くもない。ただ、何となく肌寒さを感じた。

部屋の中央には横長椅子があった。そこに座っていると、自分の周囲ぐるりが屏風になる。まるで被爆女性たちに——横になり、逆さになり、折り重なるように死んだ多くの人々に囲まれているような感じ。

広島原爆はもう五十年以上も前の出来事。しかもここは広島から遠く離れた関東の地。しかし、この部屋には五十年前の世界そのままのような空気がある。

これらの絵は何か——霊気のようなものを漂わせている。ぼくにはそう感じられた。

数年前両親に連れられ岩手県の遠野市を訪れたことがある。展示された民家「曲がり屋」の奥に「おしら様」が飾られた四畳半ほどの部屋があった。

そこには何千、何万という数の小さな馬の形をした人形が集められ、うず高く積み上げられていた。子どもを亡くした親がおしら様の人形を買ってその部屋に置いていくのだ。

そこに入ったときも、もあつとした空気が顔面を覆ったことを覚えている。目に飛び込む赤や白、黒の布模様が不気味だった。狭い部屋は空気が重くよどんでいた。今日この部屋に入ったとき感じたのも、それと同じ空気、それと同じ息苦しさだった。重い空気は絵が発する霊気なのか。

丸木夫妻は被爆体験者ではない。夫は丸木位里、夫人は俊。解説によると夫妻は八月六日の三日後、広島に入ったとある。二人はてっきり被爆しただろうと思っていたので意外だった。夫妻は被爆を直接体験したわけではなかったのだ。

それならば、なぜこの絵たちは息苦しい程の生の霊気を発散しているのだろうか。

解説を読んで納得した。広島は丸木位里氏の故郷。爆心地から二キロの彼の实家は焼け残り、多くの人が助けを求めてやって来た。位里、俊夫妻はそこで救助活動と屍体の処理をしたようだ。被爆者と共に食料を求めて広島のまちをさまよったともある。

そうして位里氏は原爆でおじとめいを亡くし父を亡くした。その五年後夫妻は「原爆の図」を描き始めた。その間何百人という被爆者の話を聞いたらしい。

モデルの中にはもちろん被爆者もいた。その人たちの思いがこの絵に移ったのか。あるいは、被爆直後の広島を目にした丸木氏の憤り、悲しみが絵に閉じこめられたのか。

約五十年前丸木夫妻は大きな真っ白の屏風紙を前にして、どんな思いで最初の一筆を描き入れたのだろう。その後完成までどんな思いで、どんな風に描いていったのか。鬼気迫るといった感じで筆を走らせたのか。あるいは、静かに黙々と描いたのか。

一階の展示室には壁面全部に掲げられた、大作「アウシュビッツの図」と「南京大虐殺の図」もあった。白と黒だけで描かれたそれらの作品も、人々のうめき声が聞こえるかのような迫力があつた。

ドイツのアウシュビッツ、中国の南京大虐殺、いずれも丸木夫妻が直に体験したわけではない。人間の痛みを感じ取る夫妻の「想像力」がこのような大作を生み出したのかもしれない。

一階奥のコーナーまで進むと休憩用のソファがあつた。部員連中が薄暗い中でぐったりと固まっていた。先生も疲れたように座っていた。

一人の女子部員が「書けないよお」と呟いた。同意の声が漏れた。みんな何だか黙りがちで、誰も「原爆の図」の感想を話そうとしない。ぼくもそうだ。

言葉を口にすると、あの絵の重さに対してあまりに軽すぎる気がする。それがわかるから言葉にし辛いのだ。

先生が「今回は単純に感想を書いたら」と言った。誰も返事をしなかった。

先生が出した課題は「丸木美術館を描く」だ。一体丸木美術館の何を描くのか。描くとしたら、やはり「原爆の図」しかないだろう。しかし、あの絵たちを文字で描くことなど不可能だ。文字にした途端に屏風絵が持っている靈氣は逃げてゆくに違いない。

それからなお暫くぼくたちはソファに座り込んでいた。そして、タクシーを使って帰ることにした。先生がタクシー会社に電話する。ぼくらは先に美術館を出た。

外は結構明るかった。何だかほっとする明るさだ。まるでタイムマシンに乗って五十年前に飛び、やっと現在に戻ったような安心感さえあつた。

この二階には五十年前のアトリエが——その空気がそのまま残っている。ぼくにはそんな風に思えた。結局「丸木美術館」を描くとしたら、ぼくが感じ取った靈氣のことを書くしかないのかもしれない。

ぼくらはタクシーが来るまで外の休憩所に座って待った。目の前の美術館は何の変哲もない壁と外見。壁にいくつか描かれた鳥のようなものが「平和」を象徴する鳩なのか。

十分程してタクシーがやって来た。ぼくらはタクシーに分乗して森林公園駅に戻った。そして、東武東上線の急行に乗って帰路に就いた。

電車で揺られながらぼくはぼんやり外の景色を眺めた。雨は相変わらずしとしと降っている。緑の多い住宅街の景色が段々少なくなり、電車は都心に近づく。

ぼくはなぜか車内の掲示広告や窓外のビルの広告を、一つ一つ丹念に読んでいた。

(丁)

絵が靈気を発していたなんて誰も信じないだろう。でも、ぼくは確かにそんなものを感じたんだ。

最初はラストの方に「いつかまた、目の前の景色が焼け野原となり、人間たちがあの原爆の図のようになることがあるだろうか。今の日本にはない。しかし、どこかでまた起こる。ぼくにはそんな風に思えた」と付け足していた。でも、最終的に削った。ぼやかした方がいいと思ったからだ。

ぼくは作品を完成させると、母さんには手紙で、のん子にはメールで送った。

のん子の返事はすぐに来た。「なかなかすごい作品を書いたじゃない。絵が靈気を発していたなんて驚いた。私も夏休みに丸木美術館に行ってみようかしら」という内容だった。

「丸木美術館を描く」のフロッピーを先生に提出すると、もう憂鬱な期末試験ウィーク突入だ。部活は中止。ぼくは中間試験後もろくに勉強していない。相変わらず音楽のできは悪かった。しかし、日本史だけはなぜかがぜん興味がわいてきた。授業はまだ平安時代辺りだけれど、ぼくは明治以降を丹念に読んで面白みを感じ始めた。特に戦前の日本史は面白かった。

[5]

七月に入って期末試験が始まった。梅雨明け宣言もないのに、まるで真夏のような暑さが続いた。ぼくは限りなく白紙に近い答案を書くために登校した。

試験が始まって二日後、母さんから返事が来た。

前略、そうですか。丸木美術館へ行きましたか。埼玉にあるんですね。名前は聞いて知っていましたが、私はまだ行ったことはありません。

あなたの作品、読みました。衝撃的だったことがよくわかりました。それほどすごい絵だったのですね。

私は高校の修学旅行が中国地方だったので、広島に行って原爆資料館を見学したことがあります。そのとき悲惨な原爆関係の遺品や映像を見てショックを受けた記憶があります。

同封の「詩らしきもの」はその頃私がその体験を基に被爆者の気持ちを考えて詩に仕上げたものです。幸ちゃんに見せるのは初めてですね。

今となっては恥ずかしいような作品ですが、読んでみてください。当時私の友人が作曲してくれるはずだったのに、できないままでした。幸ちゃんがやってみますか？

かしこ

追伸 そろそろ期末試験ですね。勉強進んでいますか。ごはんの準備など大変だと思います。がんばって下さい。めんどくみてあげられなくてホントにごめんなさいね。

追伸の言葉にはちよっとうるうる来た。勉強のことではぐさっと来た。でも、ぼくが驚いたのは母さんの詩だ。「no more ヒロシマ」という題でレポート用紙に書かれていた。

母さんが文学少女だったことは知っていたけれど、こんな詩を書いていたなんて思いもしなかった。母さんはこれを歌にしたかったようだ。詩は確かに三連から成って体裁が整っていた。

詩を読んだ瞬間ふっとメロディーがわいてきた。ぼくはすぐ部屋に入ってギターを手に取った。そして、詩を口ずさみながら少しずつ曲をつけていった。試験のことなんかどうでもよかった。

結局、期末試験は中間にも増してさんざんな結果に終わった。別にギターで作曲ばっかやってたからではない（それもちよっとはあるけど）。試験勉強らしいことを全くやらず、よくて前日教科書をちょろっと見返す程度だから当然の結果だろう。

中間の時担任の先生から「このままでは進級が危ないぞ」と言われていた。期末も同じ状況だったら、「保護者に来てもらうことになる」と宣告されていた。だから、間違いなく保護者召還を食らうことになりそうだ。でも、自業自得だから仕方ない。

期末試験最終日の午後、文芸部では「丸木美術館を描く」を製本し、二日後合評会があった。今回の作品はみんなちょっと低調だった。書くのに相当苦労したようで、事実ともフィクションともつかない中途半端な作品が多かった。先生は「感想にした方が良かったな」なんて言っていた。

マーヤは未来の少年が廃墟となった丸木美術館を訪ね、その絵に恐怖を覚えるといったフィクションに仕立てていた。これはかなりうまかった。マーヤの作品とぼくの「靈気を発する絵たち」は結構好評だった。

作者が明かされた後、マーヤから「靈気を発する絵たち」は「はてなの文体じゃないね」と言われたときはどきっとした。でも、別にあの絵に取り憑かれたわけじゃない。

先生は合評会の最後に言った。「実は私の友人に福島の高校で教員をやっている者がいるんだ。その高校では生徒から希望を取って広島に連れて行く活動をやっているらしい。夏休みに福島からずっと鈍行を使って広島まで出かけるんだ。かなり大変だね。

学校は先生の旅費は出さないけれど、活動は認めているらしい。多いときには十人近くの生徒が参加するとか。あくまで平和公園と原爆資料館をじっくり見学することが目標だという。そのときは埼玉に寄って丸木美術館も見えていくらしい。ま、本校では広島行きはちょっと無理かな」

ぼくは先生の話聞いていつかきつと広島に行ってみようと思った。

このとき夏休みまでの練習計画が発表になった。午後は毎日ワープロ室を開け、課題「さみしさ」の制作、また文化祭冊子の表紙を各自「ペイントブラシ」で作る活動(その中から

一つ選んで表紙にする)が加わった。

合評から二日後部室に行ったらマーヤが一番乗りで来ていた。

ぼくは「公園を描く」の一件以来——て言うか、マーヤの「大学教授」の作品を読んで以来、どうもマーヤと面と向かって話しをするのが苦手になっていた。しかし、パソコンを立ち上げていると、マーヤの方から近づいてきた。

「あのさ、突然なんだけど、夏休みに広島行こうか」

「……？」

ぼくはちょっとマーヤの言葉の意味が飲み込めなかった。

夏休み？ 広島？ 行くって？

「ええっ！ 広島にィ！ 何しに？」

「何しにって決まってるじゃない。原爆ドーム見て資料館を見学しに……よ」

マーヤは平然と言った。

「誰と？ みんなで行くの？ 先生は？」

「まだみんなには話してない。先生にも。先生はうちの学校では無理だろうって言ってたじゃない。だから、私たちだけでひそかに行くのさ。これからみんなに話してみる。はてなは賛成してくれるでしょ」

「そんな、ええっ、だって……」

「驚天動地」って熟語はこういうときの心境を言うのだろうか。マーヤの決断力っていうか、行動力には驚いてしまう。でも、去年だってマーヤは博物館を見に行こうと誘いながら、結局すっぱかしたしィ……。

そのことをほのめかすと、マーヤはふくれっ面になった。

「あれは悪かったってあのとき謝ったじゃない。まだ根に持ってるの。男ッらしくないな一」

「いや……ま、そうだけど、一応、念のために」

「大丈夫、今度はすっぱかさない。私丸木美術館を見て以来、広島に行きたくって仕方ないの。自分の目で原爆ドームや残された遺物を見てみたいのよ」

それはぼくだって同じだ。丸木美術館の絵の迫力を感じて以来、原爆が落とされた地はどんな空気があるのか、どんな霊気が発散されているのか。それを確かめてみたいと思った。

部員が数名集まったとき、マーヤとぼくはこの企画を持ち出した。最初みんな「すげェ」とか「面白そー」とか結構乗り気だった。だが、旅費の件ではたと詰まってしまった。どう考えても数万はかかりそう。宿泊のこともある。どうせ行くなら八月六日の、平和記念式典に参加してみたい。そんな話になると、どう計画を組んでいいのかさっぱりだった。

その夜ぼくはのん子にメールを出した。広島行きをどう進めたらいいか、彼女の知恵を借りようと思ったのだ。

翌日すぐに返事が来た。彼女の答えは単純明快だった。「まずどのくらいお金がかかるか計算する必要がある。計算方法は時刻表を調べて往復の交通費を算出し、宿泊費を一万程度とみなして計算してみる。その後参加人数を確定させて安い宿を探し、電話で予約、そ

の後列車の切符を買う」とあった。

よく考えてみればそれは最低限の手順だ。ただ、のん子にしてはちょっとそっけない感じのメールだった。

翌日午後学校でS先生から職員室の時刻表を借りた。「何するんだ」って聞くから、「夏休みにちょっと旅行するんです」と答えた。もちろん行き先は言わなかった。そして、部室でマーヤや他の連中と「一生懸命」で感じで交通費を計算した。

結果は往復の普通運賃だけで約二万円はかかる。新幹線なんか使ったら、さらに二万。宿泊で一万とみても総額五万はかかる。先生に八月六日の平和記念式典は何時に始まるか聞いたら、朝の八時からだろうと返事があった。それに間に合うように乗り継いで行ける鈍行を探したけれど、どうしてもうまく行かない。各駅停車の乗り継ぎでは広島に着くのが昼過ぎになってしまう。

この辺りでみんなのトーンはかなり下がった。オール鈍行だとまるまる一日半かかると聞いて嫌な顔をした者。費用数万と聞いて尻込みし始めた者。乗り気なのはほとんどマーヤ一人だけだった。ぼくは行きたいのとやめたいのと、気持ちは五分五分だった。

夕方帰宅してシャワーを浴びた後、ほか弁の焼き肉弁当をレンジで温めて食べた。

ふぬけたような味でおいしくなかった。その後部屋でギターを弾いていたら、電話が鳴った。降りて出るとちょっと無言だった。

聞こえてきたのはのん子の声だ。〈幸ちゃん…助けて……〉と言う。

「何?! どうしたの! 何かあったの?」

〈助けて……お願い、すぐに来て〉

「わかった、すぐ行く。家だね」

ぼくは電話を切ると二階に戻り、引き出しの奥を探って一万円札の入った封筒を取り出した。母さんが家を出ていくとき「何かあった時は使いなさい」と十万置いていった、その金だ。まだ手つかずだった。

のん子の家は隣のZ市にある。昨年引っ越しのとき手伝いに行ったから場所はだいたいわかる。電車で行けるけれど、緊急だからタクシーを使おうと思った。

タクシーだとたぶん三、四十分かかる。片道一万あれば大丈夫だろう。ぼくは念のため一万円札を三枚財布に入れて外に飛び出した。そして、タクシーをつかまえると、のん子の家のあるZ市に向かった。薄暗くなった西の空にまだお日様が残っていた。

Z駅近くにあるのん子のマンション「TコーポZ」はすぐ見つかった。ぼくはタクシーを降りるとマンションの玄関にとんで行った。

玄関のガラス製の扉は鍵が掛かっており、訪問先の住人が部屋から開ける仕組みだ。ぼくはインターホンでのん子の部屋番号を押した。返事がない。もう一度押した。

のろのろしたのん子の返事があった。ぼくが名前を言うとマンションの扉が開いた。

のん子の部屋に鍵は掛かっていなかった。ぼくはドアを開け「のん子、どうしたの」と声をかけた。返事がない。

ぼくは玄関口から通路に上がった。右がトイレと風呂、左は寝室。奥が台所だ。

奥から何かいろいろごちゃ混ぜになったような妙な匂いが漂ってくる。カレーのような、

ハンバーグのような、ほか弁のような、果物のような匂い。それだけでなく物が腐った嫌な臭いも混じっていた。冷房は効いているようで涼しかった。

「のん子、のん子ちゃん。どうしたの。大丈夫？」

ぼくがそろそろ歩いていくと、台所からのん子の声が答えた。

「こっち、台所にいる。幸ちゃん、何とかして。やめさせてよ」

涙声ののん子の声。ぼくは強盗か強姦魔でもいるのかと思って背中がぶるっと震えた。

恐る恐る台所に入った。のんこが冷蔵庫前の床にへたりこむように座っている。他に誰もいない。しかし、台所はすごいことになっていた。

冷蔵庫が開いていた。赤い光を背後にのん子が座り込んでぼりぼり何か食っている。テーブルの上には様々に食い散らかされた食品の山。見覚えのあるほか弁のパッケージ、コンビニ弁当の空き箱、おにぎりの袋、ラーメン類の袋にカップ麺の容器。ハンバーガーの袋。セロリやニンジンの切れっかす。

流しは茶碗やお皿がこれまた山になっている。流しの隅っこの溜まった残飯が腐臭を出していた。床もゴミや食い散らかした野菜、果物、食べ残しものが散乱していた。

向こうの居間はきちんと片づいている。台所だけが異様に散らかっていた。ぼくは呆然として立ちつくした。

のん子はでっかい冷蔵庫の前でキュウリを食べていた。袖の長いパジャマを着ている。彼女の背後の開いた冷蔵庫の中にほか弁が三つ見えた。それにコンビニのおりぎりが十個ほど。ハンバーガーが二、三個。そして、キュウリやニンジン、セロリにレタス、果物も桃やらみかん、メロンも半分あった。

以前喫茶店でテーブルの上を皿の山にしていた光景が思い浮かんだ。まさかこれ全部平らげるんじゃ。いや、この状況からすると、既になんか食べた後かもしれない……。

その間にもものん子は口を動かすことをやめない。もう涙顔ではない。何かに取り憑かれたかのように必死に食べている。キュウリのは後はセロリのような。ぼりぼり食って時折牛乳をぐくぐく飲む。驚くべき食欲だ。

セロリを食べ終わると冷蔵庫のハンバーガーに手をのばす。しかし、不思議なことに、のん子の身体は二ヶ月前とちっとも変わっていない。あのときと同じ体型だ。こんな調子で毎日食っていたら、無茶苦茶太るはずなのに。

ぼくはのん子のそばに行った。

「どうしたんだよのん子。やめてよ、もうたくさん食べたんじゃないの。もうやめた方がいいよ」

のん子はぼくを睨んだ。憎々しい、初めて見る目つきだった。

「だめなの。やめられないのよ。どうしても食べたくて食べたくって仕方がないの」

そう言う合間もがつがつ食べる。ぼくは居間の方を見た。お婆さんはいないようだ。一体どうすればいいんだろう。

そのとき突然のん子は立ち上がった。ふらふらと玄関の方に向かう。

「どこ行くの？」

「おトイレ……」

ぼくは待った。するとトイレの方から「ウゲー、ウゲー」と、ものすごい声が聞こえて来る。ぼくはトイレにとんで行った。

ドアを開けたままのん子が便器に顔を伏せて盛んに吐いていた。しかも、時折指を自分の口に突っ込んで戻している。げーとかうーとか苦しそうな声をもらし、目に涙を浮かべながら、彼女は食べた物を吐いていた。

ぼくはどうしていいかわからず、取りあえず彼女の背中をさすった。肉の厚みのない驚くほど痩せた背中だった。便器につかまる手首も細い。

この痩せ方だっておかしい。たくさん食べて無理矢理吐く——ぼくはいつかテレビで見た病気のことを思い出した。これって過食症ってやつじゃないのか……。

のん子はトイレに十分もいた。それから涙を拭って立ち上がると、また台所に向かう。「だめだよ、のん子。また食べるの？ また、吐き出すの？ 病院に行こう。のん子、それって病気だよ。危ないよ」

すると、のん子は意外としっかりした声で答えた。

「ううん、もう大丈夫。今日はいつになく食べたけど、吐いたんですっきりした。それにそろそろママが帰ってくるから、台所片づけなきゃ。ごめんね呼び出したりして。ママがいれば大丈夫。昨夜ママ仕事で帰って来れなかったの。だから私、いつになく食べてしまったのかな。今日は何だか戻せなくてママが帰る前にお腹がパンクしそうで怖かった。それであなたを呼び出したりして。ごめんね。私も過食症だってわかってるの」

ぼくはまた呆気にとられた。じゃあ、なんで……？

それからのん子は台所の散らかったゴミや残飯を片付け始めた。ぼくも手伝った。

でっかいゴミ袋が二つぐらいになると台所はきれいに片づいていた。流しの食器類もびかびかになった。そうして一時間もしない内に台所は元に戻った。のん子はゴミ袋を抱えて外に出て行った。

きれいになった台所を見回してぼくはしまったと思った。これじゃあお婆さんが帰ってきても、異常の証拠がないじゃないか。

のん子は戻るとテーブルの上に濃縮百パーセント・オレンジ・ジュースを出した。それからメロンも切って前のイスに腰を下ろした。二人は普通に向き合った。何てこった……。

「お婆さんはこのこと……のん子の過食症のこと知ってるの？」

ぼくが聞くと、のん子は気怠そうに答えた。

「どうかな。こんな風にきれいにするから気づいていないかも。あの人は家事全般が苦手で、冷蔵庫もめったに開かないし、たまに開いてほか弁やおにぎりがたくさんあっても、何日分かがあると思うだけで、気にとめないかもしれない」

のん子の声はさびしげだった。ぼくは心の底からわけのわからない怒りがわいて来るのを覚えた。許せないと思った。

妙な沈黙の時間が続いた。のん子は顎を両手で支えてぼうっとしている。

暫くして「もう帰っていいよ」と言った。ぼくは生返事を返しただけで動かなかった。

それから二十分ほどしてのん子のお母さんが帰ってきた。

「あーら珍しい。幸二君が来ているなんて。元気ィ？」

台所まで来てお婆さんは言った。なんか場違いなほどきうきした声だ。

のん子のお母さんは結構美人だ。髪をアップにしてしゃれたワインカラーのスーツを着ている。顔がほんのり赤い。お酒が入っているようだ。

「待っていたんです、お婆さん。のん子ちゃんが大変なことになってたの、知ってますか？」

ぼくの声はちょっと気色ばんでいた。のん子は黙っている。

「大変て何が？ 熱でもあるの。事故ったようには見えないけど」

お婆さんは「のん子、お水一杯」と言って椅子に座った。

のん子が立ち上がって冷蔵庫から冷水を取り出してコップに注いだ。

お婆さんは受け取ると、「ありがと」と言ってごくごくとおいしそうに飲んだ。

ぼくは大きな声を出しそうになるのを懸命にこらえて、今夜ぼくが見たのん子の惨状をお婆さんに説明し始めた。

彼女が台所の床に座り込んでキュウリやセロリをぼりぼり食っていたこと、台所は食べ残しの、いや、ほとんど食べ尽くした弁当やおにぎり、飲み物のパックなどゴミで一杯だったこと。だが、お婆さんはなかなか信じてくれない。

ぼくはいらいらした。台所にそんな痕跡はない。ぼくは最後に冷蔵庫の中の、ほか弁やおにぎり、ハンバーガーの山を見せた。「でも」とお婆さんは言った。

「おかしいわねえ。そんなにたくさん食べてるなら、どうしてのん子は太らないのかしら。私はむしろ最近やせがちなので、そっちの方が心配だったのよ」

「のん子はね、食べた物を吐き出しているんですよ、トイレに。無理矢理喉に指突っ込んで、ほとんど全て戻しているんです」

「あら、まあ、もったいないこと。食べ過ぎるんだったらわからなくもないけど、程々にしなきゃね。それにしても何を食べるかは娘の自由でしょ？」

ぼくは切れた。

「自由？ 自由ってなんすか。自由、自由ってあなたがたは子どもの意思を尊重しているようできて、本当は知らんぷりしてるだけじゃないですか。無関心なだけだ！

子どもがひどい状態になっているんですよ！ のん子の手とか腕とか触ってご覧なさいよ。がりがりに痩せて。おかしいと思わないんですか」

のん子は何も言わず目に涙を浮かべていた。お婆さんもぼくの言葉にちょっと気色ばんだ。

「自分の子どもに無関心な親っていないと思うけどな。そうか、のん子ちょっと手を見せて」

お婆さんはのん子の手や細い腕を触った。そして、いつ頃からたくさん食べて吐くようになったか聞き始めた。のん子によると半年前ぐらいからだ。

でも、のん子は「お母さんに心配かけたくないから」今まで黙っていたらしい。

お婆さんも漸く事態の深刻さが飲み込めてきたようだ。明日病院に連れていくと言った。

途中お婆さんが「何でそんなことになったのかしら」と呟いたときはまたぶち切れそうになった。のん子は「わからない」と答えていたけれど、ぼくは理由なんか一つしかないでしょ、と叫びたかった。

それから一時間ほどして部屋を出た。ドアの前でお婆さんが「ちょっと待って」とぼくを呼び止めた。

「今日はありがとう。心配かけてごめんなさいね。あなたの所も大変なのに、よく来てくれたわ。これ、帰りのタクシー代」

そう言っておばさんは封筒を差し出した。いいよと断ったけれど、おばさんがさらに勧めるので受け取った。マンションの外で開けたら五万も入っていた。まだ電車がある時間だ。ぼくは節約して電車で帰ることにした。

[6]

翌日のん子はZ市の総合病院に入院した。病名はやはり過食症だった。しばらくかかりそうだと、おばさんから電話があった。

一方、文芸部の広島秘密旅行は妙な雲行きになってきた。最初は四人か五人は参加できそうだったのに、お金の面や宿泊などで親の許可が得られないようだ。結局、残ったのはぼくとマーヤの二人だけになってしまった。

しかし、マーヤは絶対行きたいと言う。もうお母さんの許可は取っているらしい。費用も出してくれると言う。ぼくは最初っから父さんに話す気はない。父さんと母さんは「離婚調停」ってのが始まった。もうぼくなんかの意志が届かない世界の話になってしまった。

広島旅行の費用は母さんと、のん子のおばさんからもらったお金があるので何とかなる。八月に兄が大学から帰ってくるので、父さんには黙ったまま行ってしまうと考えていた。しかし、マーヤとぼくの二人だけで行くんじゃ、ちょっとやばいかなと思った。まだ宿だって取れてない。第一こういう場合、どうやって宿を予約すればいいのか、ちっとも思いつかなかった。

終業式の二日前ぼくとマーヤはS先生に呼び出された。先生は誰もいない会議室にぼくらを連れていくと、ちょっといたずらっぽい笑みを浮かべて言った。

「どうも不穏な動きが文芸部にあるらしい。部員だけで広島に旅行するという計画が立っているとか。ホントかな」

ぼくはあちゃーと思った。マーヤは隣ですましている。これは男としてぼくが釈明せざるを得ないようだ。

「いや、あの一その丸木美術館を見に行ったら非常に感激したんで、ぜひ本物の広島の原爆ドームや資料館を見学したいってことになったんです。それで、計画してみたんですけど、参加者が少なくなって…今はもう……無理かな…と……」

声は尻すぼみに小さくなった。それにしても誰が先生にもらしたんだ、とぼくは思った。

そしたらマーヤが口を開いた。

「先生、一緒に行っていただけませんか。どうしても今年、それも八月六日に広島に行ってみたいんです。先生が行ってくれば大丈夫だと思います。先生だって部員を広島に連れていきたいって話していたじゃありませんか」

先生は相変わらずにこにこしている。

「ま、結論を言えばそういうことにならざるを得ないようだね。昨日君のお母さんから電話があったとき、ははあと思って私も行きますと答えておいたよ」

マーヤが「やったー！」って歓声を上げた。そういうことだったのか……。

「君らを丸木美術館に連れていったし、けしかけた私の責任もあるからね。それに私は実家が九州だから帰り道でもあるんだ。ただ、こういう計画を生徒だけでたくらむのはちょっと問題だね。まだ在学中なんだから」

というわけで古典的言い方だけど、ぼくらはちょっと「お灸を据え」られた。
 「でも先生、校長先生の許可はどうするんですか。取れるんですか」ぼくは聞いた。
 「いや、もう夏休みに入るから許可を取るのは難しい。どっちにしたって私は出張にならないし……」

それから先生は急に声を落とした。
 「だから、無許可で、ひそかに、行くことにする。ナイショだぞ」
 ぼくもささやくように「わかりました……」って答えた。
 「ところで、何人参加するんだ」
 「結局、ぼくとマーヤの二人だけになってしまいました」
 ぼくは部員の状況を先生に説明した。
 「そうか。どおりで綾部のお母さんが心配して電話してきたわけだ。娘が文芸部の男の子と二人だけで広島に行くってきかないんですと。やはり君らだけか。しかし、私が行くとしても、他の連中はたぶん行かないだろう。費用の問題に関しては無理強いできないしね。いよいよもって宿泊はなし——だな」

「ええっ、泊まらないんですか？ つまんねーなー」
 「バッカモン。お前、マーヤと二人だけで行けるっていうんで、何かエッチなこと想像してたんじゃないのか」

先生はとんでもないことを言う。
 「そ、そんなァ！ エッチだなんて。そんなこと考えてもいませんよ」
 ぼくは大身振りで否定した。マーヤもぼくも真っ赤になった。まったく、教育者がそんなこと言って純真な生徒をからかっていいんだろうか。
 「それに今からではたぶん宿は取れない。五日の夜は全国各地から関係者が集まって来るから、市内の宿はどこも満杯だと思う。今日時刻表を調べて五日夜出発、六日朝現地着、そして夜神奈川帰着の計画を立てたよ」
 そう言って先生はメモ用紙を取り出した。何て早い……。
 そこには列車名と時刻が記されていた。

広島 小旅行 行程
 8月5日（水）
 横浜発 午後10時24～
 特急サンライズ出雲【ノビノビ座席】
 岡山着 6日（木）朝 6時27
 新幹線こだま乗り換え 広島着 8時前

先生は続けた。

「この行程なら車中泊だけで戻って来られる。広島には六日の朝七時四十七分に着く。タクシーをとばして八時過ぎ開始の平和記念式典に間に合うと思う。その後ドームや原爆資料館を見学して午後の新幹線で広島を発つ。夜の早い時間帯に帰宅できるはずだ。

私は広島で君たちと別れてそのまま九州へ帰省する。君らの帰りは新幹線一本だから、二人だけで充分対応できるはずだ。

私の福島の友人がその高校生を連れていったときは全て鈍行だったらしい。今回は六日朝の式典に出たいというので、特急や新幹線を使わざるを得ない。だが、費用は最低限を目指すべきだ。あくまで見学は広島のみ、他の観光はいっさい無し。特急と新幹線の乗り継ぎで、特急料金は半額になるし、君らは普通運賃の往復割引や学割も使えるから少し安いかな。それでも約四万数千円はかかるだろう。大丈夫かい」

「はい、何とかかなります」ぼくとマーヤは答えた。

これで広島行きは確定した。マーヤと一晩列車に乗って広島まで行けるなんて、ぼくはうきうきするような気持ちだった。

夏休みに突入した。のん子は入院したままでその後のことは聞いていない。

それからぼくの一学期の成績は予想通り赤点だらけだった。父さんが学校に呼び出され、担任の先生と三者面談でことになった。終了後廊下で父さんが「大丈夫か」って聞くから、ぼくは「大丈夫。二学期はがんばるから」と答えておいた。

父さんからそれ以上の言葉はなかった。実際ぼくも二学期はもう少し勉強しようと思い始めていた。音楽は仕方ないけれど、日本史とか国語は本気で勉強していこうと思った。大学にも行きたいし。

七月終わり頃「no more ヒロシマ」の曲が完成した。ぼくはこの楽譜をマーヤに見せようと思った。マーヤが歌ってくれたら最高だ。それから「さみしさ」をテーマとした作品は何を書くかちっとも思い浮かばない。課題の提出締め切りは八月二十五日だから、それまでに書き上げなければならない。

文芸部は八月二十日頃まで夏休み状態だ。マーヤとぼくと先生の広島旅行は五日の夜十時、横浜駅のホーム集合ってことになった。

何かしらいろいろやっている内八月になり、兄が大学から戻ってきた。広島行きのことを話すと、最初はいい顔をしなかったけれど、最終的に先生と一緒にならと賛成してくれた。一晩のことだし父さんには兄から適当に話してくれることになった。

そのとき兄といろいろ話した。兄は大学でボランティア活動を始めたらしい。最初はいやいやだったけど、「今は面白い———というか結構充実してやっている」と言う。兄が生き生きと楽しそうに語るの、ぼくはちょっと驚いた。

そして、八月五日になった。超遅い梅雨明けの後は猛烈な暑さが続いていた。ぼくは夕食後横浜駅に向かった。この日も熱帯夜で横浜駅はむっとくる暑さだった。

十時ちょっと前最初にホームに着いた。マーヤがすぐやって来た。制服なので遠目でもわかる。先生の指示でぼくらは制服姿だ。ぼくは軽く手をあげた。

彼女は菊の花を一束持っていた。「何それ」って聞いたら彼女は「献花!」と答えた。

そっか、うっかりしていた。さすがマーヤだ……。でも、何だか機嫌が悪い。

遅れて先生がやって来ると、ぼくらは十時二十四分発「サンライズ出雲」に乗り込んだ。

この特急は寝台を利用するのが普通らしいけど、ぼくらは費用節約のため「ノビノビ座席」という指定席だった。のんびり座れるリクライニングの席だ。指定席は三つ取ってあった。先生が前の席。一つ後ろにマーヤが窓際、ぼくが通路側に座った。席はほぼ満杯だった。

特急は定刻通り出発した。結構スピードがあって車体が左右に揺れる。ぼくらは暫く黙ったまま外の景色(ほとんど暗闇といくつかの光だけの景色だけ)を眺めた。ぼくはちらちらとマーヤの横顔を盗み見しながらなんかわくわくした。マーヤは隣で相変わらずぶすぶすとしている。

すぐに十一時を過ぎた。しかし、ちっとも眠くならない。先生は前の席でうつらうつらし始めたようだ。ぼくはバッグから「no more ヒロシマ」の楽譜を取り出した。

「ね、マーヤ。この歌見てくれる？」

ぼくは小声で言った。マーヤは楽譜を手にとって眺めた。

「どうしたの、これ。はてなが作ったの？」

「うん、曲はぼくが作った。詩の方は母さんが二十数年前高校生の時に作ったものらしい。例の『霊気を発する絵たち』、母さんにも見せたんだ。そしたら母さんがこの詩を送ってくれた。それでぼくが曲をつけたんだ」

ぼくはしまったと思った。うっかりして「送った」などと母さんが家にいないとわかる言葉を使ってしまった。しかし、マーヤは気づかなかったようだ。

「へーすごいじゃない。いい詩ね」

「ありがとう。母さんの詩だけど、そう言ってくれると嬉しいよ。マーヤ歌えるかなあ。楽器は何もないけど。一応シャープとかフラットの無い、Aマイナーの曲なんだ」

するとマーヤは五線譜を目で追いながら口の中で小さく(最初はハミングで)歌い始めた。そばで聞いているとぼくの曲想通りだった。

「そうそう、そんなメロディだよ。すごいなあ。楽譜見ただけで歌えるなんて。モー尊敬しちゃう」

「おだてないでよ。君だって音コー生じゃない。でも、これどうするの。広島に持って行って歌うとか、慰霊碑に捧げるとか……」

「いや、とんでもない。ただ君に見せたかっただけさ。持っててくれる？ いつか、どこかで歌ってくれると嬉しいな」

「わかった。任しといてよ」

それからなお暫くマーヤは曲を口ずさんでいた。

小さなマーヤの歌声は子守歌のように心地よかった。ぼくはいつの間にか眠ってしまったようだ。列車が止まる気配でふっと目を覚ました。ホームの看板が静岡駅を示している。隣のマーヤは頬杖をついてホームを見つめていた。

「何時？」ぼくは小さな声でマーヤに聞いた。

「0時二十分」マーヤが答えた。列車がゆっくり動き始めた。

ぼくは何だか目が冁えてきた。まだ寝ないんだったら何か話そうかとマーヤに言った。

そしたらマーヤは「ねえ……あなたは何で生きてるの？」などと聞いてきた。

彼女は窓の外の景色(変わらぬ暗闇と小さな光の景色)を見つめていた。こっちを見もしないで。

「ぼくは……空気吸っていろんな物食べて…生きています」

マーヤが振り向いて睨む。もちろんぼくは質問の意味がわかって茶化したんだ。

「ゴメン。でも、改まってそんなこと聞かれると困っちゃうよ」

マーヤはまた窓外に目を向けた。

「わからないからよ。どうして生きているのか、わからないからよ」

そうか、そうだよな。わからないから聞くんだ。でも、こないだ十六になったばかりのぼくが答えるには荷が重い。仮に答えたって彼女は満足しないに決まっている。それにそんなことを聞きたくなるのは今現在熱中し充実しているものがないから——以前S先生がそんなことを言っていた。今S先生は前の席で寝ている。

「以前S先生が言ってたよ。生きることに疑問を持つのは思春期特有の感性だって。それに熱中するものがないから、なぜ生きているのかわからなくなるんだって。確かに何かをやって充実していたら、そんなこと考えないかもしれない」

そしたらマーヤは小さな声だけど、痛烈な言葉を返してきた。

「確かにそうかもしれない。でも、そんなこと聞いたって何の足しにもならない。思春期特有の感性だなんて言われても、じゃあ二十過ぎて三十過ぎたら、そんな疑問を感じなくなるの。それってもっと悲しいことだと思う。それに私いろいろなものに熱中した。でも、何だか冷めていた。白けていたの。そりゃあバンド組んで歌っていたときは楽しかった。全てを忘れていたって感じ？ でも、歌いながら叫びながら、私は感じていた。これじゃない、これではないって。熱中して歌っている私を、冷たく見つめる自分自身を感じるのよ。何をやっていてもそう。心底、心の底から熱中できない……あなたはそんなこと——ない？」

思いがけないマーヤの告白だ。どうしてこんなときに、と思った。いや、列車に乗って暗闇の中を、はるばる広島まで行こうとしている。こんな旅だから出てきたのか。

マーヤは突然振り向いてぼくの目をまっすぐ見た。列車が大きく揺れた。ぼくはマーヤの背中を見ていたので、どきっと来た。やばいほどの至近距離で見つめ合うことになったからだ。

何だか悲しそうな目だった。そして、とても澄んだ瞳だった。マーヤには失礼だけど、それは子犬の目に似てものすごく澄んだ黒色をしていた。

ぼくはちょっとどぎまぎした。恋人同士の男なら彼女のしゃべくりをやめさせようと、口で口をふさいだかもしれない。そんな小説かドラマのワンシーンを思い起こさせる。しかし、彼女の瞳は安易な解決法を拒否している(ように見えた)。

ぼくは彼女の視線を受け止めることができず、ちょっと顔を引いて窓の外の景色——と言ってもやっぱり真っ暗の暗闇——に視線を逸らした。ふっとマーヤのトラウマって何だろうと思った。

「ごめん。ぼくには……何だかよくわからない。でも、マーヤは以前公園であるがままでいいって言ってたじゃない。あるがままに生きることに疑問なんか感じないってことじゃないの。ぼくはマーヤの天真爛漫って言うか、積極的で行動的なところは自分のしたい

ことを一直線にやることだから、悩みなんかないだろうって思っていた」

するとマーヤは姿勢を正してまっすぐ前を見た。

「私ってそんなに積極的でないし行動的でもないよ。悩みだってあるし。もちろんあるがままだに生きたいと思うけど、時々なんで人間って生きているのかな……と不思議に思うことがあるんだ。

でも、丸木美術館見て思ったし、たぶん明日の原爆の遺物を見ても感じると思うけど、ああいうことがいつか起こるかも、と思うと怖くなるね。生きることへの疑問なんか吹っ飛んじゃうじゃない。自分の意志で死にたいから爆弾で殺されたり、身体をずたずたにされたくないし」

ぼくは自分の意志であっても死にたくないと思った。けど、黙っていた。

マーヤは続けた。「でも、ふっと痛い目に遭わず安らかに死ねたらいいな、とも思う。よけいなこと悩まずに」

それは悪魔の囁きだと思う。ぼくは呟くように言った。

「でも、安らかに死ぬの方法なんてないよ、きっと。死ぬことってすごく痛くて辛いことだと思うな」

マーヤはぽつりと「そうだよな……」と言った。

それで話は途切れてしまった。ぼくらにはこんな会話を交わしても解決策はない。決着がつかないまま……終わることが…多い……。

【7】

翌朝岡山駅ではダッシュで六時三十五分の新幹線に乗り換えた。待ち時間が七分しかなかったからだ。そして、新幹線が七時四十七分に広島駅に着くと、ぼくらは小走りでタクシー乗り場に向かった。そして八時ちょい過ぎ、やっと広島平和記念公園に着いた。快晴だった

そのとき式典はもう始まっていた。重々しい感じの曲が辺りに流れている。ぼくらはタクシーを降りると、人々でごったがえした中を会場に進んだ。

司会者の声がスピーカーを通して大きく聞こえてくる。目の前に二つの白い建物がある。左側の方は一階がピロティのようになっていた(後に二つの建物が原爆資料館とわかった)。二つの建物をつなぐ通路の下を潜って進むと、そこが平和記念式典の野外会場だった。

ずらりとイスが並べられ、参加者が座っている。正面に菊の花の祭壇。その向こうに馬の鞍のような形のモニュメントがあった。

前の方の席は主催者や被爆者、自治体関係者、来賓の席らしい。後ろの方は【一般席】と立て看板がある。会場全体はロープで囲われ、警察官や警備の人がほぼ一メートル間隔で立っていた。背後の建物の陰に救護テントやお茶、冷水コーナーが設けられていた。

会場には一体何人の人がいるのか。数千人か一万人か。いや、ロープの外側の人々も含めると、数万人の人がいるのかもしれない。ただ、座席後部は結構空白があった。ロープの入り口にいた係らしい人に聞くと、一般席なら誰でも座っていいという。

今しも去年の八月から今年七月までの一年間、原爆で亡くなった人の「名簿」が奉納されるところだった。司会者のマイクの声が大きく辺りに響く。

「原爆死没者名簿は…これで…二十万三千七百四十五人になりました」

ぼくらは何が何だかわからないうちに一般席の途中、空いていた所に腰を下ろした。左から先生、マーヤ、ぼくの順で座った。マーヤは手に菊の花束を抱えて。花を持っている人は周囲にも結構いた。

朝と言うのに猛烈に暑い。汗がたらたら流れ落ちる。広島はちょっと予想以上の暑さだ。空は青く太陽が激しく照りつけている。時折小さな雲に隠れる。すると少しだけ涼しい風が吹く。しかし、すぐに日が射し込む。首筋からじわっと汗が流れ落ちる。蝉の声が波のように強くなったり弱くなったりする。ぼくはやっと落ち着いて周囲を見回した。

会場は公園のようだ。多くの椅子は芝生の上に置かれていた。濃い緑の樹木がぐるりを取り囲んでいる。背後の二つの白い建物(原爆資料館)の屋上に十数台のテレビカメラがあった。ここが被爆の中心地なのだろうか。既に式典は始まっているのに、会場全体はどことなくざわついていて。近くの人の私語も聞こえる。

その間にも式は進んで献花が始まっていた。正面演台の向こう、菊の花々が飾られた祭壇に広島市長や遺族代表らが花束を供える。馬の鞍の形をしたモニュメントは「原爆慰霊碑」のようだ。その向こうに炎が小さく燃えあがっている。さらに向こう、樹木の上でっかいビル。右には葉が茂った木々がある。その上にちょこんと頭を出した鉄骨だけの丸屋根が見える。もしかしたらあれは――。

ぼくはマーヤの耳元で囁いた。

「あの向こうに小さく見えるの、あれ原爆ドームかな？」

「うん？ あ、そうだね。原爆ドームかしら？」マーヤの声はちょっと上ずっていた。

先生がそうだと言った。そして「あの向こうの照明設備、あれは広島球場だ」と説明してくれた。広島球場って原爆ドームのすぐそばにあったんだ。

献花終了後司会の声が告げる。

「まもなく…八時十五分となります。原爆により…亡くなった方々のご冥福を祈り…一分間の黙祷をささげます。一同…ご起立願います」

そろそろと人々が起立する。僕らも立ち上がった。

「もくとー！」急にしーんとなった。ぼくも頭を垂れ、目をつぶった。

鐘の音がかーん、かーんと鳴り響く。しかし、ぼくの心はまだこの場にとけ込めないでいる。

ぼくはただ目をつむりうつむいているだけで、亡くなった人への冥福を祈るような心境ではなかった。

その後は広島市長の平和宣言、広島市内子ども代表二名による「平和への誓い」と続き、「平和の太陽」が合唱された。同時に鳩が放たれ、会場の上空を舞った。

そして、内閣総理大臣の挨拶に始まり、衆議院参議院代表、広島県知事、県議会議長の挨拶が続いた。それぞれの挨拶は原爆の悲惨さ、平和の大切さを訴え、インド、パキスタンの核実験への抗議も述べられていた。そして、最後に「広島平和の歌」が全員で合唱されて閉式となった。九時を過ぎていた。

参加者がぞろぞろ立ち上がる。司会の人「来賓が先に退場されます。一般の方は今暫くお待ち下さい」とあわてた口調で叫んでいる。それは何度か繰り返された。

ぼくにとってはあつという間の平和記念式典だった。

ぼくはため息をついた。マーヤも長いため息をついた。

「何だかよくわからない式だったね」ぼくは感想を言った。

「うーん、別にわからないことはなかったけど、わたしは思っていたのとちょっと違った……かな」

ぼくが言いたかったのもそういうことだ。何がどう違っていたと言われても困るけど、心で思い描いていたものと微妙に違っていた。もっとドラマチックだと思っていたかもしれない。しかし、平和の式典なんだからそんなことはないだろう。実際静かで穏やかな式だった。それで当然だ。

あるいは誰かがわめき叫ぶような式典を想像していたか。いや、それも集会やデモじゃないんだからやはり違う。ただ、ぼくやマーヤにとっては一回こっきりの式典。あれほど出たいと思っていた式典なのに、あまり感激が沸かなかった。慌ただしくやって来て落ち着かないまま参加したからだろうか。

S先生が「献花を済ませたら先に資料館に行こう。それからこの周辺を案内する」と言った。

ぼくらに反対はない。馬の鞍型の慰霊碑の前は多くの人々が並んでいた。ぼくらはそのかたまりの最後尾についた。人波はゆっくり前進する。暫くして慰霊碑の前に出た。マーヤが祭壇に菊の花を供え、ぼくらは合掌した。慰霊碑の中の石版には「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから」と刻まれていた。

「先生、資料館に入る前に、あそこの水飲みに行きませんか」

ぼくはもう喉がからからだった。

「そうだな、かなり暑いし喉も渴いたから行こうか」

ぼくらは無料飲料水のコーナーに行き、水をもらって飲んだ。生き返るように冷たくおいしい水だった。係りのおばさんたちが「広島の水道水です」と言っている。

それから原爆資料館に向かった。資料館入り口も入場券を買う人々でかたまりができていた。離ればなれになるかもしれないので、はぐれたら二時間後西館の出口のところで落ち合うことにした。入場料は五十円だった。

一階の展示コーナーに入る。ここも人で一杯だ。一階は【被爆までの広島】と題され、パネルの写真やその説明が主だった。

明治時代から始まって一八八九年広島市が誕生。近くの呉市は軍港となり、広島は軍用地に。広島は教育のまち、商業地として栄える。日清日露の戦争では軍の拠点となった。

一九一〇年韓国併合、一九三七年日中戦争。そして太平洋戦争。その間広島は軍需物資の生産地として発展してゆく。朝鮮人や中国人の強制労働もあり、パネルの説明は写真を含めて広島「そのとき」までをたどっている。それらは日本史の近代編でよくお目にかかる項目と説明だ。

しかし、見学者は食い入るように説明を読んでいる。そのせいか、人の列はなかなか動かなかった。気持ちはよくわかる。それら全てが一瞬にして廃墟となる、その瞬間までの

人間の営みが描かれているからだ。

一九三七年十二月のパネルには「南京陥落 広島市のちょうちん行列」とあった。夜提灯を抱え、行進する人々が写されていた。説明文には南京大虐殺のことも書かれている。

ぼくは丸木美術館の「南京大虐殺の図」を思い出した。つまり、南京で日本軍の虐殺が行われていたとき、何も知らない広島市民は南京が陥落したと喜んでいたわけだ。その後自分たちが原爆によって虐殺されることも知らずに。そして本土空襲、勤労働員、学童疎開と戦火が拡大。最後に原爆投下を迎える。

【なぜ広島に原爆が落とされたのか】のコーナーも人が多かった。熱心にメモを取っている中学生や小学生がいた。アメリカのマンハッタン計画、原子爆弾製造。投下目標にされた日本の都市の名が列挙されている。最終的に広島となった経緯——米国の対共産圏、特にソ連への対抗意識、終戦後のイニシアチブ。爆弾の効果を確かめるため軍需基地としての広島が狙われたことが記されていた。

そのコーナーのすぐ後ろ、ガラス製の陳列台の中に八時十五分で止まった時計があった。それは黒い皮の小さな腕時計できっかり八時十五分を指していた。そのとき原爆が落とされ、時計は止まった。ぼくはそれを見て漸く八時十五分に黙祷をした意味を理解した。

一階中央部の数台連なった天井テレビは米軍機から見た原爆投下の様子が放映されていた。米軍基地を飛び立ったB29(エノラ・ゲイ)。空中に浮かぶキノコ雲の画面。飛行機から撮ったキノコ雲だ。パイロットが「全て順調」と事務的に報告している。

【廃墟のヒロシマ】のコーナー。原爆は一キログラムのウランが爆発した。TNT火薬一万五千トン分の威力だと。爆心地の温度はセ氏三千度から四千度に達した。一面がれきとなった広島市の写真が壁に貼ってある。一階中央部には被爆前の広島市と焼け野原となった市街地一帯が縮尺模型で作られていた。比べてみると原爆の破壊ぶりがよくわかる。建物の形を残しているのは原爆ドームだけだった。

二階への階段を上りながら、ぼくは振り返って一階を見回した。見学者は圧倒的に大人が多い。中学生や小学生、幼児を抱えた家族連れ、車椅子の人に外国人もいた。一階はパネル説明が主で被爆の遺物は少ないように思えた。

二階は【戦争 原爆と市民】と題され、終戦直後の様子がやはりパネルで説明されている。

バラック建てに住む人々、原爆孤児、占領軍と原爆報道の検閲、一九五〇年朝鮮戦争の時は「平和祭」への中止命令が出た。

そして、放射能による病気、ケロイド、内臓障害、癌等の説明。被爆女性の胎児に原爆小頭症が発病。壁のテレビ画面が焼け残った小学校での救護活動を放映している。

ぼくは後ずさりながら振り返ったとき、あっと思った。そこに巨大な原爆ドームの屋根があったからだ。一階から見上げたときはちっとも気づかなかった。

たぶん実物大のドームだろう、二階から吹き抜けの三階部分にかけて設置されていた。黒くすすけたような骨組み。結構大きい。どこかの男性が「これ本物かねえ」とつぶやいた。それほどよくできていた。

一九五四年には「第五福竜丸」ビキニ環礁被爆事件、日本人がまた放射能を浴びる。そして、外国人被爆者のパネル。吹き抜けの残り部分は半三階になっていて、【核時代】と題された展示パネルが続く。現在の日本と世界の核の話だ。

日本の非核三原則の説明、米軍のC3Iシステムのこと——つまり、日本の米軍基地は核の指揮、管制、諜報能力を持っている。女性の二人連れが「結局これがある限り日本はまた核攻撃されるね」と言っていた。

最後に【平和への歩み】と題されたパネルがあった。平和運動の流れが語られ、被爆者の高齢化が述べられていた。そこを過ぎるとTシャツやキーホルダーなどを売る店があった。その先の立て看板にインド、パキスタン関連の新聞記事が掲載されていた。改めて読んでみると、インドの核実験が五月十二日と十四日、パキスタンが五月二十九日だった。

そこに立っていると、先生、次いでマーヤがやって来た。

「原爆の資料ってこれだけなんですか。何だか被爆の遺物がほとんどないんですけど」

ぼくが聞くと、先生はそれなら西館の方にたくさんあると言った。

ぼくらは通路を通して西館を目指した。右の窓から先ほどの野外会場が見下ろせる。まだたくさんの人たちが慰霊碑の前に固まっていた。

西館に入ると、まず左側の壁一面に巨大なキノコ雲の写真があった。これは地上から撮影されたもののようだ。そして、廃墟となったレンガの建物の中を歩くような形で進むと、被爆直後の燃える地上の様子が蠟人形を使って制作されていた。人形は三体立っている。子どもと大人二人。着物は引き裂け、手を幽霊のように突きだし、その手から皮膚が垂れ下がっている。薄暗い中で赤く燃える炎や、黒煙が描かれている。確かにこんな状況だったのだろう。原爆の悲惨さは伝わってくる。でも、それらはみな作り物だ。

それからは全て本物の遺物が続々と展示されていた。焼け焦げぼろぼろになった女学生の制服。焦げたズボン、熔けかかった靴に下駄。炭化した米の入った黒ずんだ弁当箱、へこんで曲がった水筒。片方のレンズだけのメガネ。再び八時十五分で停止した腕時計。

銀行入り口の御影石にできた人の影。これは爆心地から二六〇メートルの所にあっただけだ。高さ二メートル程の壁と床で地面に人型の影がある。本物なのかレプリカなのか、その説明はなかった。

悲惨だったのは大火傷を負った人の写真だ。それは黒こげになって生きているのか死んでいるのかわからない。写真は三枚でみな白黒だった。こっちを睨む視線が恨めしげだ。

また、熔けた瓦の固まりがある。それはごつごつとして溶岩の塊のようだ。そして、焼け付いた着物の痕が残る女性の写真。これはカラーだった。

女性は片肌ぬぎで背後からだから顔は見えない。青い服、白い肌、焦げ茶色の網目が肌にこびりついていて。ちょっと目をそむけたくなる。

その先には赤茶色の髪の毛の固まりも陳列されていた。被爆二週間後、十八歳の女性の頭髮が全て抜けた、その髪の毛らしい。なぜか黒くない。赤茶色というか脱色されたような色だった。

そして、アルコール漬けのケロイドの皮膚。火傷を負った皮膚がアルコール漬けになっている。生々しくてとても人間のものとは思えない。ぼくはすぐ目をそむけた。

さらに進むと黒い雨が幾筋か垂れている白壁。井伏鱒二の小説「黒い雨」を思い出す。そして、大火災の猛威か、歪んだ鬼瓦(怒りの顔は唇がゆがんでいた)、曲がりくねった自転車、土器や陶器、瓶類。顔と身体の一部が欠け、ぽっかり穴が空いた仏像……。

それで、遺物の展示は終了だった。西館は説明文が少なかったせいか人の流れは早かった。

それから野代会場を見下ろせる広い廊下に出た。多くの人がベンチに座って休憩している。廊下壁面にテレビが埋め込まれ、被爆者が体験を語る映像が流されていた。ぼくもベンチに腰かけてテレビを見た。マーヤと先生はまだ出てこない。

ぼくは今見てきた原爆遺物を頭の中で思い起こしていた。原爆の悲惨さはよくわかった。ただ、何かしら自分が思い描いていたものと違った。うまく説明できない異和感がある。遺物や写真はぼくにストレートに迫ってくるはずなのに、もどかしさが残った。人が多くじっくり見られなかったからだろうか。あるいは、先に丸木美術館の「原爆の図」を見てしまったからだろうか。

資料館を巡ってある種のショックはあった。この地で五十三年前原爆が落とされ、多くの人が苦しみ死んだ。それは間違いのない事実。その証拠となる遺品がここにある。けれども、丸木美術館はもっと衝撃的だった。丸木美術館の二階、屏風絵の前で感じた奇妙な空気。あのもあっとくる空気がここには感じられなかった。なぜだろう……。

暫くして先生、そしてマーヤが出て来た。マーヤはちょっと顔色が青白い。ぼくと違ってこの遺物は衝撃的だったのかもしれない。

狭い階段を下りて外に出た。館内の冷房に慣れていたので熱気が襲う。太陽の日差しがきつい。広島が八月六日がこんなに暑いなんて。ぼくらはもう一度無料飲料水のコーナーに行き、水もらって飲んだ。本当においしい水だった。被爆の時大火の中で水を求める人々がたくさんいたと聞く。猛烈に熱かっただろう、苦しかっただろうと思う。

[8]

その後ぼくとマーヤは平和公園内を先生の案内で歩き回った。慰霊碑を右に見て一年中燃えている「平和の灯」のそばを通過して暫く進むと、「原爆の子の像」があった。両手を広げ頭に鶴のような彫像をつけた像が高さ数メートルの台座の上に立っている。台座の下にはたくさんの折り鶴が捧げられていた。

それから樹木の間をさらに進むと川に出た。川の向こう岸に原爆ドームがある。むき出しの鉄骨、赤褐色のレンガ、壁が欠けている。窓らしき部分はぽっかり穴があいていた。頭部のむき出しの鉄骨が丸屋根だったことを示している。周囲は樹木で覆われていた。その前をたくさんの人々が行き来している。

先生が「向かって左側の橋が相生橋、ずっと右側……あの橋が元安橋、流れている川は元安川だよ」と指さしながら説明してくれた。元安川は都市の川にしてはきれいな方だ。船も何艘か浮かんでいる。

「ドームの近くまで行けるんですね」マーヤが聞いた。

「もちろん。元安橋を渡って行こう」

すると遠くの方から太鼓の音が聞こえてきた。どんつく・どんつくって感じの音が次第に大きくなる。先頭の旗を持った人の姿が見えた。手に小さな太鼓を持つ人たちも数十人。太鼓を鳴らしながら行進していた。宗教団体だろうか。

元安橋を渡って川沿いの道を進むと原爆ドームのそばに出た。ドームの右手には噴水がある。そこは小さな広場になっており、五人編成のバンドが歌を歌っていた。

ドームは近くで見るとかなり高い。ビルなら五階建てくらいか。色あせたレンガ、むき出しのコンクリ、曲がりくねった鉄の芯がはっきり見える。高さ一メートルほどの鉄柵と植え込みがドームを囲んでいる。中に入ることはできないようだ。

植え込みに切れ目があったので、ぼくは鉄柵のすぐそばまで行ってみた。建物の内部がよく見える。地面にはがれきが散乱していた。がれきは意外ときれいだ。焼けて黒々としたかけらがあるかと思ったけど、そうではなかった。そこから内部を眺めた。心に迫るものがない……。

その後先生とマーヤものぞきに行った。

「中のがれきってあの時のままなんですか」

ぼくは歩道に戻ってきた先生に聞いた。

「そうだなあ。ここは人の出入りを禁止しているし、基本的にそのまま残しているはずだから、五十三年前のままだと思うよ。ただ建物は何年か前崩落防止のために補強施設が付けられたはずだ。ほら、屋根を支えている金属棒が見えるだろ。壁と壁の間のつかい棒のようなものも。あれがそのとき取り付けられた支えだと思う」

ぼくらは原爆ドームをぐるりと一周した。電車道の側には二つの石碑があった。原爆ドームが補修されたこと、そして、世界遺産に指定されたことが記されていた。

さらに歩くと先ほどの噴水に出た。噴水の手前では世界地図を張り付けた大きな立て看板の前で、数十名の人が「世界に平和を」と唱和している。これも宗教団体なんだろうか。

噴水の向こうではバンドの歌が流れている。全て男性の五人組だった。ギターが二台、ベースとボンゴがあって小さなアンプとスピーカーで聞かせていた。マイクは二本あった。三十人程の人が聞いていた。ぼくは何だか胸がドキドキした。ここであの歌を歌ってみたいと思った。

ぼくらはバンドの歌と演奏を聞いた。歌っているのは二十歳前後でひげ面のごっつい顔をした若者だった。二曲目が終わってばらばらと拍手が起こる。彼らは一礼してちょっと引き下がった。肩からギターを下ろしている。どうやら休憩時間のようだ。

そのときマーヤが突然ぼくの肩をたたいて言った。

「ねえ、はてな。ここできみのお母さんの歌を歌おうよ」

ぼくはびっくりした。まるでぼくの心中を覗いたかのような、そして、それをすぐ口にするマーヤの行動力に驚嘆した。しかし、ぼくは臆病だった。

「ええっ！ そんな…そ、そんなこと無理だよ」

「大丈夫。せっかくだからやんなよ。わたしも一緒に歌うから」

マーヤはぼくの返事を待たず、つかつかとひげ面の若者の所に歩み寄った。

ぼくは先生を振り返った。先生はにやにやしながら鉄柵に寄りかかってぼくらを見てい

る。

マーヤはひげ面と交渉した。ごっつい顔に似ず彼はいい人のようだ。気楽にギターとマイクを貸してくれた。ギターを手にマーヤがやって来る。

「さ、歌おう」マーヤが言った。ぼくも覚悟を決めた。でも、まだぐずった。

「わかった。でも、ぼくは主としてギターを弾くからマーヤが歌ってね」

マーヤはうなづいた。マーヤがどの程度楽譜を読めていたかわからない。しかし、もうやるしかない。こういうのを正しく「ぶっつけ本番」で言うんだろう。

ぼくはギターを抱え、マイクに近づいてAマイナーのコードを鳴らし始めた。マーヤは楽譜を手に、隣のマイクの前に立つ。ぼくは一言説明した方がいいと思った。

「すみません、突然お願いして。ぼくらは今日初めて広島に来た高校生です。実は今から歌う歌は『no more ヒロシマ』と言ってぼくの母さんが作詞してぼくが曲をつけたものです。下手くそですけど聞いて下さい」

バンドのメンバーが拍手してくれた。ボンゴの人は適当なリズムをたたいてくれそうだ。何が起こったのかって感じで聴衆はさっきより増えていた。

ぼくは「no more ヒロシマ」を歌い始めた。マーヤがすぐに続いた。

♪美しい草花 清らかな流れ
 広島のまち 母は生まれた
 真夏の朝 いつものように
 おはようって 言ったとき
 きらめく光 母の目を奪い
 熱い熱い風 母の髪 焦がした
 とても痛かったでしょう
 とても苦しかったでしょう
 no more ヒロシマ 母を かせせ
 no more ヒロシマ 失われた 命を かせせ

楽しそうなセミの声 空泳ぐオニヤンマ
 広島をまち 母は育った
 真夏の朝 子どもらの声
 おはようの 声が空に
 きらめく光 子らの目を奪い
 熱い熱い風 子らの身体 焦がした
 とても痛かったでしょう
 とても苦しかったでしょう
 no more ヒロシマ 子どもたちを かせせ
 no more ヒロシマ 失われた 命を かせせ

教会の鐘が鳴る 美しい夜

広島のまち わたしは好き
 真夏の朝 またその日が来る
 忘れられぬ 時が
 母の痛みを わたしは感じる
 うめき苦しむ人の声を わたしは感じる
 言葉に表せぬ怒り
 身を震わせ突きつける怒り
 no more ヒロシマ 母を かえせ
 no more ヒロシマ 失われた 命を かえせ ♪

途中から次第に辺りが静かになった。そして、マーヤの大きな声が広場に流れ始めた。
 マーヤは完璧に楽譜を読んでいた。マーヤの声は素晴らしかった。澄んだ力強い声だった。

音コー生のぼくとしてはちょっとくじけた。でも、おかげで歌は最高になった。マーヤがいなかったら、ぼくの声は目の前の人たちに届かなかったに違いない。いや、そもそも彼女がいなかったら、ぼくはここで歌おうなどと思わなかっただろう。

歌い終わると大きな拍手が起こった。バンドマンのリーダーが「ブラボー」って声を上げた。

ぼくらは何度も頭を下げた。ひげ面のリーダーがマイクを持って「もう一度、飛び入りの反戦高校生に大きな拍手を」と言った。そうか、この歌って反戦反核の歌だったんだ。ぼくはそう言われて改めてわかったような気がした。

S先生も「やるじゃないか」って顔で拍手していた。

ぼくらはバンドの人たちにお礼を言ってその場を離れた。

それからぼくらはなお平和公園の中を歩き回った。ぼくは暫く興奮状態だった。そして、遅い昼食を済ませると(先生が広島名物お好み焼きを奢ってくれた)、タクシーで広島駅に向かった。

すぐに三十分後の新幹線を取った。ぼくとマーヤは東京行き、先生は博多行きだ。ぼくはやっと落ち着きを取り戻した。

先生がおみやげを買いに行った。ぼくとマーヤはその間待合室でちょっと話した。

「ありがとう。ドームの下で『no more ヒロシマ』を歌えるなんて思ってもみなかった。何だかすごくすっきりした。マーヤのおかげだ」

「うん。わたしも歌い終わってとっても気持ちよかった。あれいい歌だもの。詩も曲もいいと思う」

ぼくは嬉しく面はゆかった。マーヤが言ってくれて余計嬉しかった。しかし、ぼくは昨夜列車の中でマーヤが言っていたことを思い出した。

「でも、どう？ ホントのところはやっぱどこか白けていたんじゃないの？ 冷めた視線はあった？」

するとマーヤはくすっと笑った。

「あれはね、しばしば夜中に湧いてくるわたしの別人格の言葉。ああやって昼間大きな声で歌っているときは、それなりに充実しているから大丈夫」

「そっか、良かった」

マーヤは笑った。明るい笑顔だった。

ぼくは平和公園にいた間感じていた疑問を口にした。

「でも、こんなこと言うと不謹慎かもしれないけど、平和公園にあったものってみんなきれいだったね。川も近くのビルも橋も道も、慰霊碑も平和の鐘や原爆の子の像も。みんなきれいで資料館の遺物を除くと、あの崩れかけた原爆ドームだけがここに原爆が落とされたってことを証明していた」

「そうね。確かにあのドームがなかったら、あそこに原爆が落とされたなんて思えないわね。それほど今は普通のまちだもの」

そうだ、五十三年前ここいら一帯に原爆が落とされ、焼け野原になったなんてとても思えない。いくら資料館の中に被爆の遺品があったとしても、外に出てみればごく普通の都市の風景。原爆ドームがなかったら、全くわからないだろう。ドームを残してくれて良かったと思う。でも……

「無理な注文だと思うけど、ぼくはあの公園全体を五十三年前のまま残してほしかったなと思う。そして、ドームを含めてその中を歩き回ったら、もっと違う何かを感じたと思う。第一あの公園の青々と茂った太い幹の木々はどこから持ってきたものだろう？ 昔のままだと地面はがれきだらけだろうし、木なんか生えたかどうか。かなり印象が違ふと思うよ」

「そうね。でも、公園として考えたとき樹木とか芝とか植えてきれいにしたかっただろうし。私は原爆資料館の遺物だけでも胸に迫ってきた。原爆って本当に悲惨だとわかった。見つめるのが苦しかった。でも、見つめなきゃいけないんだと思った。先生にこのことを書けって言われたら困るな。やっぱり書きづらい」

「うん……」

ぼくはマーヤにまだ話していない感想がある。それはこの場では言いづらかった。丸木美術館の「原爆の図」と原爆資料館の展示物の違い。それは美しいものと醜いものの違いではないかと思い始めていた。

丸木美術館で「原爆の図」を初めて見たとき、最初目をそむけたくなる絵だと思った。しかし、暫く眺めているうちに、ぼくはものすごく引き込まれていった。絵の細部や描かれた人の顔をじっくり眺めていた。

ところが、ここ原爆資料館の遺物は特に人に関連した物——人間が黒こげになった写真とか、ケロイドの標本とか、抜けた髪の毛とか——それらはちらっと見て目をそむけると、もうそのまま行ってしまいたいものばかりだった。

西館の人の流れは早かった。だから、そんな風を感じたのはぼくだけではなかったかもしれない。つまり、それらは醜いものだった。じっくり見たい気にさせなかった。

当たり前だ、原爆は醜い、戦争は酷い、それを展示して見せているだけだ。

でも、今思うと丸木美術館の「原爆の図」は同じ醜い状況を描いていながら、ずっと見続けていたいと思わせる何か——魅力と言うか美しさがあった。それは戦争を美化するとか、醜い状況をきれいに描いたのと違う。「原爆の図」を見ても原爆、戦争の悲惨さはよくわかる。でも、ぼくはあの絵をずっと見続け、そして、戦争とか原爆について感じ考える

ことができた。

あの屏風絵から靈気を感じ取ったと思い、なぜだろうかと考えた。しかし、ここ原爆資料館では醜い物をちらっと眺め、(悪い言い方だけど)そのままだった。じっくり感じ、考えるってことはなかった。そして館外に出れば、きれいな空と緑あふれた公園がある。

外の世界でもう一度原爆を実感させてくれるのはドームだけだ。それでさえきれいな空間の中であってドームの中に入ることは許されていない。ぼくは原爆ドームにも靈気など感じなかった。

それから資料館の遺物には人間が感じられなかった。現にほとんどのものは大火で焼け焦げた「物」ばかり。人間が写っていたのは写真だけ。だが、それも黒こげになった姿とか、向こう向きで顔を見せない女性の写真。それは「物」と同じ感じだった。「原爆の図」だってもちろん折り重なった死体のような人間の絵がたくさんあった。でも、あそこのは顔が描かれていた。道ばたで呆けたように座る男性の顔。赤ん坊に乳をやる女性の顔。ぼくはそれもじっくり見つめることができた。そして、今でもその顔を思い出せる。

考えてみれば「原爆の図」は圧倒的に人間——被爆した人間が描かれていた。状況は悲惨なのに、悲惨だとわかるのに、なぜか絵全体は醜くなかった。ぼくは絵に吸い付けられ、ずっとその場において何とも言えない靈気を感じ取ったのだ。ぼくは一枚でいいから、丸木夫妻の「原爆の図」を資料館に置いてほしいと思った。

S先生が手にお土産とぼくら用の缶ジュース二本を抱えて戻ってきた。

新幹線の出発時間が近づいている。

「ありがとうございました」ぼくとマーヤは先生にお礼を言った。

「いや、いいんだ。どうせ帰り道だから。逆に君らは新幹線一本だし、新横浜で乗り換えるだけだから大丈夫と思うけど、気をつけて帰ってくれよ。寝過ごしたりしないように。特にはてなはナイトとしてマーヤを守るように」

ナイトだなんて先生はえらく時代錯誤なことを言う。

「はい、大丈夫です。でも、たぶんマーヤの方がしっかりしていると思います」

ぼくは言った。マーヤは黙って力こぶを作るかのように右腕を上げてみせた。この「のり」がぼくは好きだ。

「じゃ、さようなら」

先生は博多行きのホームに向かった。ぼくとマーヤは東京行きのホームへ。

新横浜まで五時間弱、マーヤと二人きりの時間が持てる。何を話して帰ろうか。

でも、結構疲れたし、この小旅行をぼんやり振り返りながら、二人とも新横浜までずっと眠ったままかもしれない。それでもいいや、とぼくは思った。(了)

後記:御影祐のホームページには「CPUSAN作曲集」というページがあります。

その中の「[二] 70 年代フォークソング風楽曲」の「4」に作中歌「ノーモアヒロシマ」があります。17 歳のころ御影祐が作詞作曲したものです(編曲は 2004 年)。

よろしければ訪ねてみてください。ただし「MUSIC ON!!」をクリックしても、「安全でないダウンロード」とか「保護されていないなんたらかんたら」などと警告が出ます。

無視して(も大丈夫なので)「安全でないファイルをダウンロード」して(^_^;)ファイル名をクリックすれば音楽ソフトがスタートして曲を聞くことができます(目下修復中)。

歌詞は正常に動作しますが、文字は曲に合わせて少しずつ出るようになっています。

↓

<http://mikageyuu.flier.jp/music/musictop.html#70music>